# 縄文時代晩期後半の蓋形土器

佐 藤 祐 輔

## はじめに

東北地方における縄文時代晩期の土器(通称「亀ヶ岡式土器」)は、長い縄文時代を通してみても最も器種分化が進んだ時期であり、その多様性は古くから考古学者を注目させてきた。主な大別器種をみても、浅鉢・深鉢・皿・壺・注口・香炉形土器など様々であり、現代人の我々から見ても縄文時代人の製作・想像力には感歎させられるほどである。

これら様々な器種が揃う「亀ヶ岡式土器」ではあるが、その中に蓋形土器(以下、「蓋」と簡略する)が組成していることは案外知られていないのではないであろうか。例え該期の報告書などで、蓋について触れられることがあったとしても、出土土器中の珍品や土製品の一部として扱われることが大半である。確かに、出土土器組成中で蓋の占める割合は1%にも満たない場合が通常であり、出土したとしても1遺跡1点程度である。このようなこともあり、縄文時代晩期の蓋について本格的に扱った論考は皆無に近い。

それに対して、弥生土器に組成する蓋は、出土量の豊富さもあってか、古くから注目されてきた経緯があり(森本1934)、近年まで多くの論考がみられ、研究が進展している(伊藤2004、小田野1983、角南2003、鈴木1998、林1966)。

では縄文土器に稀にみられる蓋という器種は、「亀ヶ岡式土器」の中で不問にされるほど、意味を持たない器種なのであろうか。かつて山内清男は、縄文土器の蓋について「蓋は稀にあるが、弥生式のものとは違って居る。壺形土器と蓋~(中略)~の如く組合せて使用する形態は縄紋式とは趣を異にして居る」(山内1937)と考えていながらも、縄文時代からの伝統を重視していた山内は、北陸地方の縄文晩期土器に組成する蓋と、近畿地方の弥生土器に組成する蓋との関連についても少なからず関心

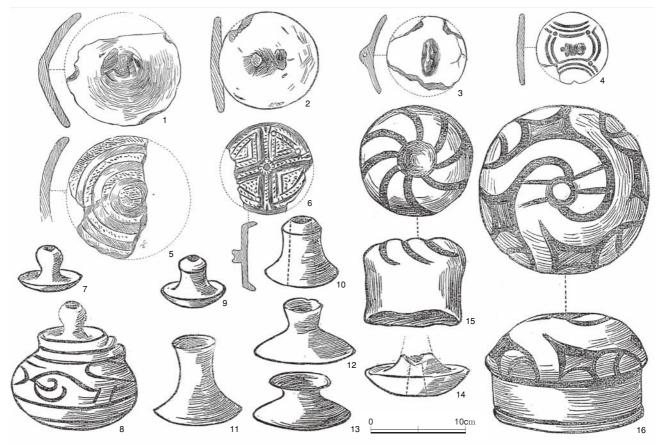
を抱いていたようであり、縄文時代の蓋が弥生土器に影響を与えた可能性も考慮している点は、注目すべきであるう (注1)。

また、東北弥生土器研究を進めてきた須藤隆は、甕蓋が組成することを重視して東北弥生土器の認定を行ってきた。この蓋に対する認識は、西日本における弥生土器の器種組成が伝播して遠賀川系土器とともに東北地方に定着するというものであった(須藤1973・83)。後年、東北弥生土器の壺蓋が東北縄文晩期の蓋から成立するという理解も示しており(須藤2000)、蓋という器種を一括して西日本弥生土器の影響とする見解を暗に否定している。

このように縄文晩期の蓋は、系統的に弥生土器の壺蓋へと繋がる可能性が非常に高いにもかかわらず、具体的な分析が行われずに現在に至っており、統一した見解はみられない。よって本稿では、蓋についての研究史を簡単に振り返り、これまで考古学者がどのように蓋を扱ってきたのかを確認し、その後、晩期の蓋を集成し、分析を加えてみたいと思う。これまで、蓋が異形土器として扱われ、また特殊な土器として認識されてきたのには何かしらの理由があるはずであり、考古学者の感覚的な判断ではなく、正面から蓋と向き合って分析を行い、再度特殊な器種として位置づける作業を行う。その際には、特殊な蓋とセットとなる「特殊な身」についても検討する。また、弥生土器の蓋との関連についても触れることとする。

## 蓋の研究史(注2)

縄文晩期の蓋を中心とした論考は、上記のごとく皆無 に近いが、縄文後期や弥生土器の蓋についての論考は比 較的多くみられる。時代は違えども、蓋という同一器種 を扱った論考は、参考となる部分も多くあるため、振り 返ってみようと思う。



第1図 佐藤傅蔵による蓋形土器の指摘

#### 1. 戦前の研究

蓋を中心に扱った最も古い文献は、佐藤傳蔵1898であ ろう(注3)。佐藤は、縄文時代の「蓋及蓋とみられるもの」 (佐藤1898)を集成し、それが蓋として機能していた可能 性を初めて指摘した(第1図)。佐藤が集成した資料は、 縄文後期~弥生土器の蓋に加えて、様々な土製品も含ま れているが、佐藤の報告は、固定観念化された現代の考 古学研究者にとって、非常に新しい問題も投げかけてい る点で重要である。それは、現在スタンプ状(形)土製品 として把握されている遺物(第1図7・9~14)が、壺 と一緒に蓋として出土(青森県西津軽郡木造出土)した ことを報告している点である(第1図7・8)。スタンプ 状(形) 土製品については、今日に至っても用途が確定 していないが、蓋の可能性も考えられており、佐藤の指 摘について再度耳を傾ける必要もあろう。また、耳飾と して現在考えられている遺物(第1図15・16)に対して も蓋の可能性を考えている。

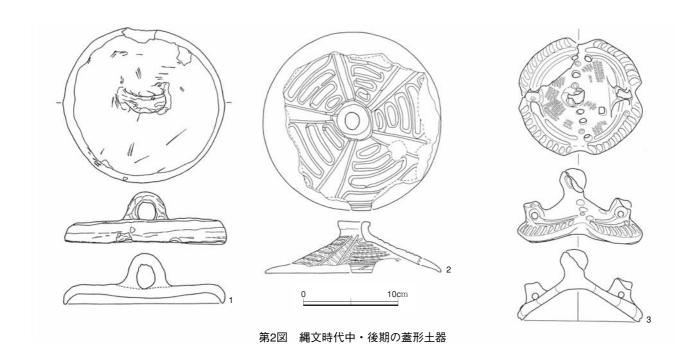
八木奘三郎は、佐藤傳蔵の指摘した蓋を取り上げて、 縄文土器の一器種として解説している(八木1902 第1 図4・6・9・16)。蓋の「本源は貯蔵物を入る、か汚れ を避くるか天然物は切りて使用せし頃の遺風か此數者に出でざる可しと考ふ若し」、「如何なる形状の物と如何なる大さのものとは蓋が伴うや否やを推究するも亦一興なるべし」(八木1902)と述べ、蓋の起源の問題や蓋と身の関係を知るには口径の分析が必要であることを指摘している。また、蓋の形態分類も行い、「富士山形」・「満頭形」・「板蓋形」・「曲物蓋の形」などに分類しているが、具体的な資料の提示がなく、詳細は不明確である。

その後、弥生土器の蓋について森本六爾・小林行雄らが形態、穿孔位置や穿孔数などを基に分類を行い、蓋の用途や変遷について研究を行っている(森本1934、末永ほか1943)。

## 2. 戦後の研究

戦前、蓋に対する関心は比較的高いものであったが、 戦後すぐには、縄文・弥生土器の蓋ともに目立った研究 がなされることはなかった。

小田野哲憲は、東北地方の弥生土器にみられる蓋を集成し、ススの付着位置から使用方法について考察を行い、「かぶせ蓋」と「合せ蓋」・「落し蓋」が存在すること



を指摘している(小田野1983)。この研究は、単純な口径 比較のみで、蓋と身の関係を考えることへの問題提起と も考えられ、使用痕の分析に視点を置いた点で、非常に 評価できる。

伊藤正人は、これまでの縄文土器の蓋に関する研究史を的確にまとめ、関東地方の縄文中期末から後期の蓋を集成・分類して、蓋の変化や分布範囲について検討している(伊藤1990)。それに加えて、蓋と身の関係や機能の問題についても触れて、今後の課題を提起し、蓋の基礎的な研究を行っている。

伊藤実は、弥生時代の蓋の使用方法を検討し、器形の変化と連動して蓋の材質や使用方法が変化していったことを指摘した(伊藤2004)。

以上のように、縄文後期や弥生土器の蓋に関する研究は古くから行われ、比較的進んでいるにもかかわらず、縄文晩期後半の蓋については全く研究が進んでいない。これまで、集成が行われた形跡もないので、まずは集成作業を行うことから始めなければならないようである。

# 蓋集成

#### 1. 縄文時代晩期以前の蓋(第2図)

蓋が土器組成の中に定着するのは、縄文中期末・後期 初頭からであろう<sup>(注4)</sup>。それ以前の時期においては、東 北地方の大木 8 a · 8 b 式に組成する無文の蓋が山形県西海淵遺跡で出土している (第 2 図 1 阿部·黒坂1991)。大きさなどから考えて、おそらくキャリパー形の深鉢とセット関係を持っていると考えられる。

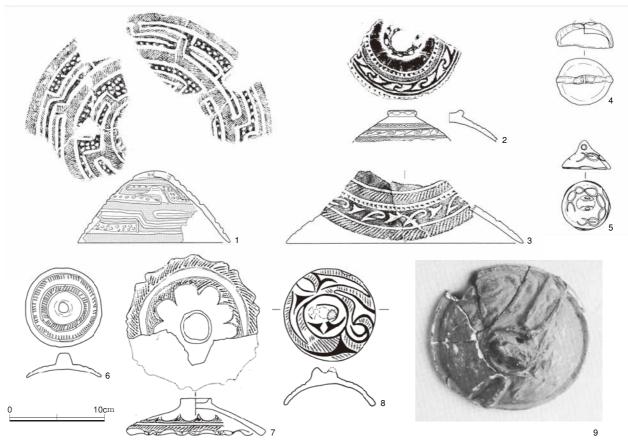
縄文中・後期の蓋は、注口土器とセットとなることが明らかになっているが、東北地方の後期前半には、岩手県相ノ沢遺跡などで様々なバリエーションをもった蓋が顕著にみられる(第2図2 宮本2000)。その多くは笠形を成しているが、天井部を持たずに貫通している点に特徴がみられる。

同様に後期前半の北陸地方では、三十稲場式以降、顕著に蓋が組成するようになる(第2図3 品田・平吹2001)。これらの蓋は、胴部への穿孔だけではなく環状把手が紐掛けの機能として働いており、身と蓋の関係が縄文晩期や他地域の蓋とは大きく異なる様子が窺える。また、身・蓋ともに波状口縁をなすことが多く、土器製作当初から身と蓋のセット関係が意識されていたことも考えられる。

## 2. 縄文時代晩期前半の蓋 (第3図)

#### a. 北陸地方の蓋

晩期前半の蓋は、御経塚式・中屋式期に北陸地方を中 心として組成しており、土器組成中で一定量の役割を



第3図 晩期前半の蓋形土器 (東北・北陸)

担っている。注1で述べたように、当地方の蓋は、山内 清男・佐原真などによって、畿内の弥生土器に組成する 蓋との関連が古くより指摘されているが、現状でその関 連性を積極的に肯定することはできない。

形態を見てみると、つまみ部は環状を呈して、胴部は直線的に口縁部に至っている(第3図2・3)。つまみ部は加飾されることが多く、二又状になる場合もある。この形態は、いわゆる笠形の蓋であり、形態だけをみると弥生土器の甕蓋に非常によく似ているため、山内や佐原はこの点に注目していたのであろう。ただし、晩期前半から弥生時代までにはかなりの時間的な距離が存在し、晩期後半には北陸地方で蓋の存在が明確ではなくなることなどから、否定する見解のほうが多いようである。伊藤実は「縄文の蓋形土器は直径が10~15 ほどの小型のものが主流で、注口土器などの蓋として使われたものと考えられる。今のところ煮炊用土器(深鉢)には土器蓋はなかったとしてよい」(伊藤2004)としている。伊藤が指摘するように、該期には条痕を施す粗製深鉢が煮沸具として大きな位置を占めており、粗製深鉢よりもはるか

に口径の小さい蓋が組み合うとは考えられない。ただ し、該期には粗製深鉢よりも小さな精製深鉢も組成して おり、口径などから考えて、おそらく蓋はこれら精製深 鉢とセットになるものと考えられる。

つまみの付かない丸底状の蓋もあり(第3図1)、様々なバリエーションをもつ点も特徴的である。

#### b. 東北地方の蓋

東北地方縄文晩期には、蓋として断定はできないなが らも、その可能性のある土器が出土している。岩手県花 巻市小田遺跡(第3図4・5 中村1979)や宮城県七ヶ 浜町二月田貝塚(第3図7 後藤1972)・福島県飯館村羽 白C遺跡(第3図8 鈴鹿ほか1988)の蓋が、晩期前半 期に位置づけられよう。

岩手県向館遺跡では、後期後半の蓋が住居内から同時期の資料と共に出土している(第3図6 笹平・小山内1994)。つまみ部は棒状を呈しているものの、器形が丸みをもち、穿孔を施さない点で、羽白C遺跡の蓋と類似する。

小田遺跡の蓋は、つまみ部に横位の貫通孔を設けて、 紐掛孔としている(第3図5)。同様の形態は、相ノ沢遺跡でも出土している(宮本2000)。胴部文様は楕円文を横位に展開するのみであり、編年的な位置づけは難しいが、出土土器の中心が大洞B2~C1期なので、この範疇に収まるものと考えられる。第3図4は無文の例で、「一文字」の隆起区画が施され、つまみ部が欠けている。つまみ部には、穿孔の溝が残っており、5のような横位の穿孔があった可能性がある。

二月田貝塚の資料(第3図7)は、蓋として図示したものの、台付浅鉢の可能性が高い。報告書では蓋として図示されており、本稿では大洞B1期の蓋として取り上げた (注5)。円形のつまみ部は、上述した北陸地方の晩期前半の蓋に似るが、装飾はなく、相違点がみられる。

羽白C遺跡の蓋(第3図8)は、二又状のつまみ部を 有し、胴部は半球状を呈して丸みをもっている。文様 は、磨消縄文で三叉文を描いており、大洞B1期と考え られる。穿孔は施されない。

やや時期が下る例としては、宮城県沼津貝塚で大洞C1期の蓋が出土している(第3図9 東北大学文学部1982)。扁平な器形の中央に二又状のつまみ部を作出し、つまみ部を貫通するように横位に穿孔を施している。小田・羽白C遺跡例が半球状を呈していたのに対して、器形が大きく異なる。胴部には、つまみ部と直行するように二条の隆起帯が走り、2単位の文様区画を行っている。この文様を区画する隆起帯は、後述する大洞C2期以降の蓋へと系統的に繋がる可能性もあるが、該期の資料は沼津貝塚の1点だけなので、その確証はない。文様は、写真からでははっきりしないが、雲形文が彫りこんで描出されているので、大洞C1期とした。ちなみに伊東信雄が指摘していた沼津貝塚の蓋(伊東1985、中村1988)は、この土器を指している。

## 3. 縄文時代晩期後半の蓋 (表2参照)

#### a. 大洞C 2期 (第4·5図)

大洞C2期として時期比定が確実な例は、秋田県平鹿遺跡SX005出土土器である(小玉1983 第4図1)。SX005からは、一括して廃棄したと考えられる13個体の土器が出土しており、精製土器(2~6)から判断すると、大洞C2式でも中頃に比定される(高橋1993)。1

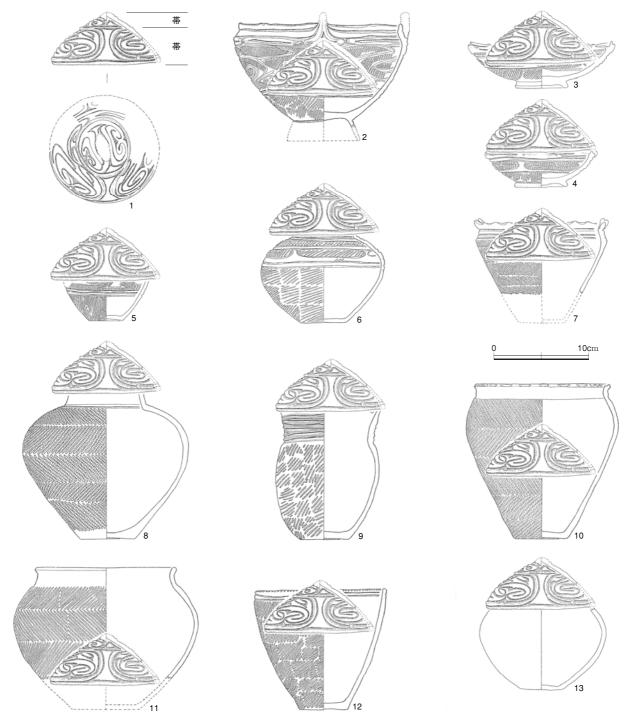
は、つまみ部(I帯)の頂点と体部(II帯)が一部欠けているだけで、文様や器形を知る上では問題のない資料である。II帯は、隆起帯で区画し、その内部には入り組んだ沈線文を3単位施している(文様展開図は、小林・小川1989を参照した)。隆起帯は図正面部分のみで収束する。I帯は、II帯同様の入組文を2単位で描いている。入組文の文様構成は3・4と類似する点はあるものの、1の文様には副線や補助単位文が充填され、より曲線的で複雑な印象を与える。区画する隆起帯には、キザミや刺突などの装飾はみられない。口縁部の穿孔は、残存部には2ヶ所空けられており、等間隔に廻るとすれば、推定で4ヶ所穿孔されていることになる。穿孔が焼成前か後かは、報告書に記述がないため不明である。

これらは良好な一括資料であるため、この蓋とセットとなる身について考えてみることにしたい。ただし、この遺構は、良好な一括資料であるが、遺構の性格上(廃棄坑?)、土器そのものの使用状態を示した出土状態ではないと考えられ、出土状況も図面では示されておらず、写真図版からだけでは、その詳細を知ることはできない。

試しに2~13に、1の蓋(口径12.0 )を被せてみると、2・10・11は蓋よりも口径が大きすぎて、その機能を果たすことができない。例え組み合ったとしても、落し蓋のように機能していたことになる。3・4は、浅鉢に蓋が被さるという奇妙な組み合わせになってしまい、積極的にセット関係を示す根拠はない。とすると、身として最も機能しそうなものは6・8・13の壺および7・9・12の中形深鉢であろう。壺の場合は「かぶせ蓋」として、深鉢の場合は「合せ蓋」・「落し蓋」の可能性が考えられる。しかし、いずれの土器(身)も口縁部に穿孔がなされておらず、穿孔のある蓋とセット関係を示しているとは考えられない。

以上のことから、S X 005は使用時の状態を示した遺構ではなく、土器捨て場のような廃棄坑であった可能性が高い。蓋の身となる土器が共伴していないことも考えられるが、口径から考えると、壺もしくはやや小ぶりの深鉢が身として機能していた可能性も捨てきれない。

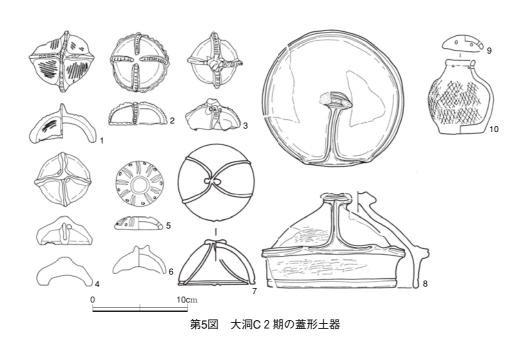
平鹿遺跡以外の該期の蓋としては、花巻市(旧石鳥谷町)安堵屋敷遺跡(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1984)や北上市九年橋遺跡(藤村ほか1978)・山



第4図 秋田県平鹿遺跡SX005出土土器

形県村山市宮の前遺跡(山口ほか1995)などで出土しているが、3遺跡共に遺跡の存続期間が長く、詳細な所属時期が不明確である。平鹿遺跡の蓋と比較すると、文様や装飾が簡素で、小形であることがわかる。

安堵屋敷遺跡では5点中4点が文様を持たず、隆起区 画にキザミを入れる程度である(第5図1~3)。隆起区 画は、平鹿遺跡のように曲線的な「X」字状とは異なり、 真「十字」に区画している(以下「4単位隆起区画」と 称する 第5図1~4)。2は隆起区画が中央で連結せず、つまみ部を形成していない。1は地文に縄文を施しており、今回集成した中で、縄文を施す唯一の例である。隆起区画を持たない5は、中央の円文から、9単位の放射状沈線(2条1単位)が延びており、後述する弥生前期に伴う蓋(第20図3など)の文様構成と酷似する。安堵屋敷遺跡からは少数ながら、大洞A'式~弥生前期の土器が出土しているので、これらに伴う可能性もある。



穿孔方法についてみてみると、3・4はつまみ部へ横位に穿孔され、5は放射状沈線間に等間隔で9箇所穿孔を行っている。

九年橋遺跡の蓋(第5図7)は、曲線的な「X」字状を呈し、頂部に二又状の突起(つまみ部)を作出している。

一方、宮の前遺跡の蓋(第5図8)は、口縁部が直線的に立ち上がり、隆起区画もつまみ部から一方向に伸びるのみ(一単位隆起区画)で、類例は現在のところ見当たらない。全面丁寧なミガキ調整が行われ、赤彩の痕跡も一部で見られる。宮の前遺跡は、大洞C2式からA1式までの変化が土器捨て場で層位的に検出され、8は大洞C2式でも新しい段階の層位から出土しており、該期に位置づけられる可能性が高いが、大洞A1式期まで下る可能性も否定できない。

第5図9・10は、郡山市滝ノ口遺跡で「蓋を伴って出土した」(郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団1988) ミニチュア土器である。10の胴部には網目状撚糸文が施されており、他の土器も考慮に入れると、大洞C2期に位置づけられよう。両土器共に穿孔が穿たれている。

#### **b. 大洞A1期**(第6図)

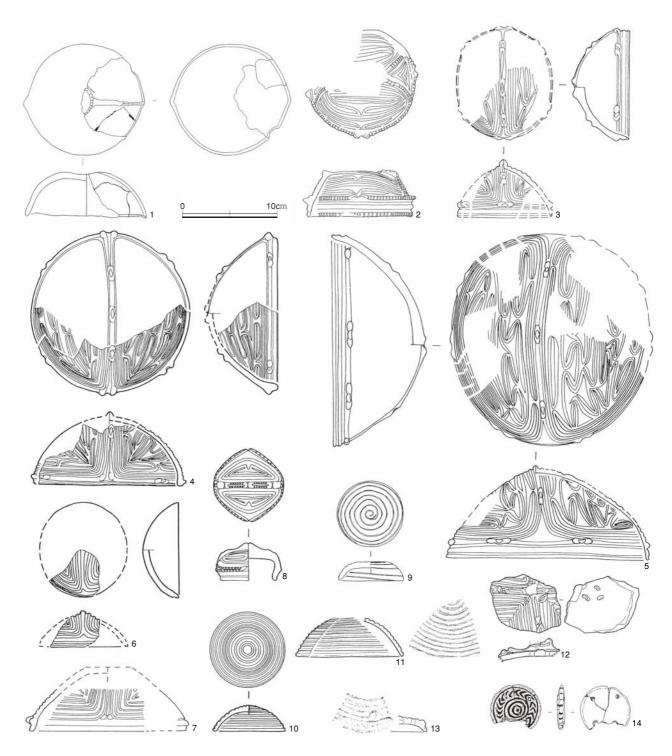
大洞A期の蓋が、前後の時期を通してみても、最も多く確認することができた。

大洞A1期の確実な例は、北上市九年橋遺跡 (第6図 3~5 藤村1988・91)・大船渡市宮野貝塚例(佐々木2002 整がとれている。文様帯構成をみると、平鹿遺跡の蓋は、つまみ部(I 帯)と胴部(I 帯)が上下に分離していたのに対して、A1 期の蓋は一帯構成の文様帯となっている。

2単位隆起区画の両端は、第6図2や5のように、二 又状に分岐して、区画を一周する。この二又状に分岐する三角状の区画(以下「三角状区画」と呼称)は、大洞 C2期の隆起区画(第4図1・第5図7)が密接に接することによって成立したものであろう。三角状区画は、 宮の前遺跡の蓋(第5図8)のように、既に大洞C2期 に作出されている。隆起区画上には、つまみ状の突起が 3ヶ所つけられる例が多い(第6図3~5)。サイズも大 小様々であり、第6図5が最大のもので口径21.2cm、最 小のものは口径4.6cm となり、組み合わさる身のサイズ も様々であったことが想像できる。

隆起区画をもたない蓋も存在する。第6図9~11であるが、蓋として機能していたかは断言できない。小形で 丸底を呈する点から、後続する高瀬山遺跡(第7図15)の ような蓋と関連するのではないだろうか。

また、弥生前期になってから出現すると考えられている逆皿形(倒皿形)の蓋が、宮城県香ノ木遺跡で大洞A1期の層から出土しており(第6図13 佐々木1985)、非常に興味深い。天井部には同心円文(渦文?)が描かれ、穿孔も施されている点で、弥生前期の蓋(第19図1・9)と非常によく似る。青森県二枚橋(2)遺跡では、円盤形の蓋が出土しており(第6図14 橘ほか2001)、同様に

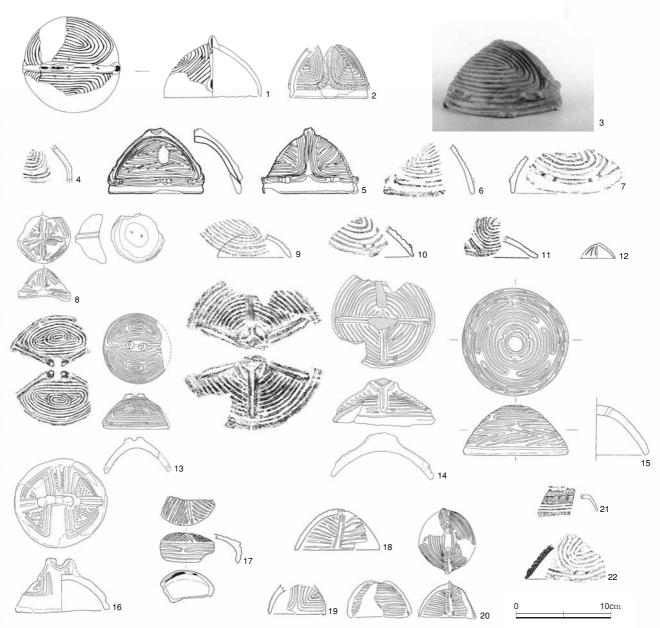


第6図 大洞A1期の蓋形土器

弥生の円盤形の壺蓋と関連性が考えられ、大洞A1期に は既に、様々なバリエーションを持った蓋が存在してい たことが分かる。

## c. 大洞A 2期(第7図)(注6)

大洞A2期の確実な例は、大沼遺跡出土の蓋である (第7図16 榊原2001)。大沼遺跡で伴出する土器の大半 は、大洞A2期であり、蓋の帰属年代が大洞A1期まで 遡ることはない (注7)。文様区画が沈線化し (以下「沈線 区画」と呼称)、その内部は刺突を充填し、後続する弥生 前期の蓋と文様構成が極めて良く似ている。器面全面に 赤彩を施している点 (藤沼・小川2006を参照) で、前段 階の蓋と同様である。つまみ部は、二又に分かれた突起 状をしており、前段階に顕著に認められた隆起区画上の



第7図 大洞A2·A´期の蓋形土器

突起の名残と考えられる。前段階の名残は、沈線区画に も認められ、図からは読み取れないが、やや隆起して作 出されている。

青森県では、他に二枚橋(2)遺跡(第7図1 橘ほか2000))や沢山(1)遺跡(第7図2 児玉1994)・亀ヶ岡遺跡(第7図3 鈴木・岩渕2001)・剣吉荒町遺跡(第7図4 鈴木・木村1988)で出土している。沢山(1)遺跡も、大沼遺跡同様、大洞A2~A'式期の遺跡であり、該期に位置づけられるのは間違いない。

秋田県上新城中学校遺跡では、2単位隆起区画の蓋が 出土している(石郷岡ほか1992 第7図5)。胴部文様は 「Z」字状の綾杉文が描かれている。綾杉文は、後述する 同遺跡で出土した該期の壺の文様と関連を指摘できる。 破片でも同心円文を描く蓋が1点出土している(第7図 6)。

岩手県では、川岸場 I 遺跡で破片資料であるが亀ヶ岡・上新城中学校例と同様、同心円文を描いた蓋を確認できる(第7図7)。

第7図8は、宮城県山王囲遺跡出土の蓋である (注8)。 沈線化が進み、新しい要素を持つが、4単位隆起区画は 比較的しっかりと作出されているので該期に位置づけた が、蓋が出土したR区の他の土器は大洞A'期から弥生 前期の資料が主体であり (大洞C 2 期も少数混じる)、時 期が下る可能性もある。 第7図13·14は、山形県げんだい遺跡の蓋である (注9)。 13が2単位隆起区画、14が4単位隆起区画である。14の文様は、隆起区画を橋渡しするように、平行する沈線が同心円状に幾重にも施される。沈線は非常にラフに描かれている。二ヶ所の穿孔 (現存) は、1つを隆起区画上の沈線内に施し、もう一つを区画内に施している。13の文様は、同心円文を基本として、中央部に対向する綾杉文を充填し、等間隔に4ヶ所穿孔する。つまみ部は、大沼遺跡の例と同様に、二又の突起状をなす。両者ともに赤彩痕が残る。

また、大洞A2期に帰属する可能性がある蓋として、 山形県高瀬山遺跡の蓋がある(第7図15)。この蓋は、こ れまで見てきた資料とは異なり、区画文をもたないとこ ろに大きな特徴がある。通常であれば、丸底の鉢として 扱われるであろうが、底面部に穿孔をもつことから、蓋 として扱われている(小林2005)。器形だけをみれば、大 洞A1期の同心円文のみを施した、小形の蓋(第6図10) に似る。内・外面ともに丁寧に漆が塗布され、内面に 至っては、漆を塗った際に残る刷毛の跡までもが残って いる好資料である。文様構成は、下段に矢羽根状文を、 上段には横長の「日」の字文を2段施している。これら の文様は、大洞A式の範疇として考えられるが、大洞A 2式が遺跡単位でまとまって出土した天童市砂子田遺跡 で同様の文様構成を持つ土器が出土しているので、高瀬 山遺跡の蓋もおそらく大洞A2式に位置づけられよ う (注10)<sub>0</sub>

#### d. 大洞A'期

該期の資料として積極的に扱える蓋は非常に少ないが、大洞A1・A2期の蓋と比較したときに、文様描出手法の沈線化した資料が、該期に属する可能性が高い。大沼遺跡例(第7図16)のように、大洞A2期には既に沈線化が進んでいることも、この変遷過程を裏づけている。

青森県宇鉄遺跡からは、大洞A'期の土器に伴い、第7図17の蓋が出土している。器形は、口縁部から直線的に立ち上がり、天井部はやや丸みをもつ。丸みをもった天井部は、前段階からの名残りであろう。区画文は、一条の沈線で描かれるのみであり、前段階のものとは大きく異なる。側面には簡素な(副線の抜けた)流水型変形



第8図 晩期蓋形土器の分布範囲

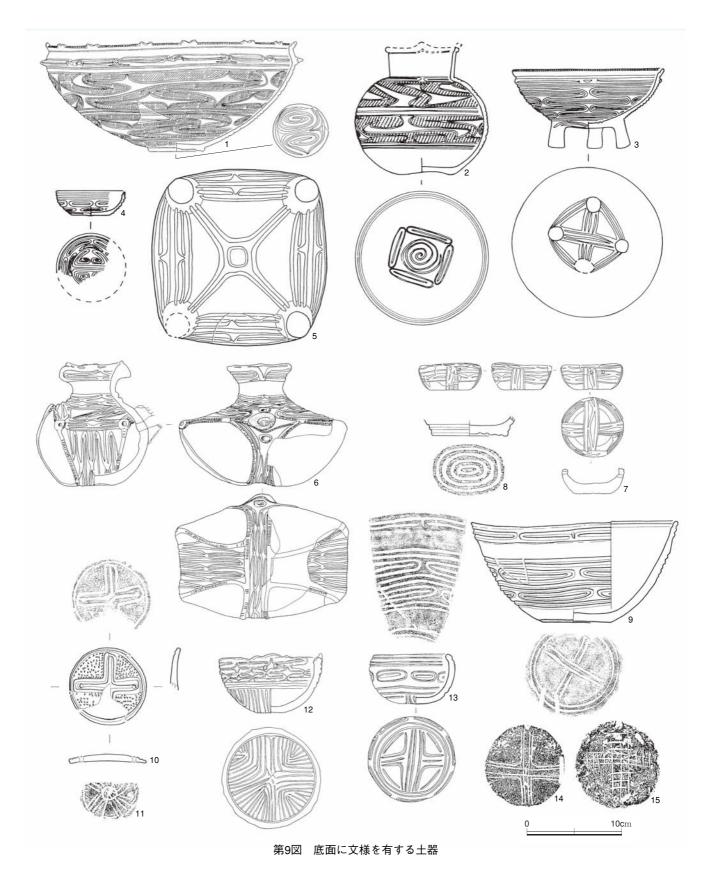
#### 工字文を描く。

岩手県細田遺跡の蓋(第7図18)は、宇鉄遺跡の蓋よりも丸みをもった器形で、前段階の特徴を良く残している。区画文は二条の沈線で行い、第7図14のように区画文と区画文とを同心円状に繋いでいる。川岸場Ⅱ遺跡の例(第7図19・20)も沈線化していることから、該期に位置づけられる可能性が高い(油11)。

上述した香ノ木遺跡と同様の器形の蓋は、剣吉荒町遺跡で、大洞A'期の土器と共に出土しており(第7図21)、逆皿形の蓋としては最も古いものとして報告されている(鈴木・木村1988)。

#### 4. 蓋の分布範囲 (第8図)

以上、縄文晩期の蓋を概観してきたが、所属する時期



幅は広く、長い間継続的に製作・使用されていたことが わかる。また、その分布範囲も東北地方一円に広く分布 している。

北限は青森県むつ市の二枚橋(2)遺跡で(橘ほか

2001)、本州の北限に近い位置まで分布している。蓋の南限は、現状で山形県の高瀬山遺跡であるが(小林ほか2005)、隆起区画を持つ蓋だけをみれば、河北町花ノ木遺跡となる(第7図11)。この分布範囲は、一般的に理解さ

れている大洞式の分布範囲に収まり、晩期後半に独自の 土器群を構成する浮線文土器分布圏では茨城県殿内遺跡 以外(第7図22)に出土していない点は注目される。た だし、浮線文土器分布圏には、文様構成が類似する土器 がみられ、隆起区画をもつ蓋との関連が指摘できるの で、この点については次節で述べることにしよう。

## Ⅳ. 蓋の成立過程とその展開

晩期後半の蓋は、上記のように25遺跡から計47点出土していることが確認できた。いずれの遺跡も、各地域を代表する遺跡であり、小規模な遺跡からは出土していない。つまり、晩期後半の土製の蓋は東北地方でも限られた集団によって、製作・使用されていた可能性が高いことになる。また、他の器種とは異なり、基本的に1遺跡で1~数個体しか出土しないのが通例で、遺跡内における扱われ方も得意な状態であった可能性がある。この現象は、北陸地方における晩期前半の出土状況とは明らかに異なり、晩期後半の蓋へと系統的に連続しないことを示唆し、一律に「蓋」として扱い得るものではないことがわかる。

では、晩期後半の蓋はどのようにして成立し、展開していったのであろうか。この問題を解決するために、蓋の形状や文様に注目して検討してみようと思う。

#### 1. 底面に文様をもつ土器について

#### a. 胴部文様と底部文様の関係

現状で、晩期後半の蓋へと系統的に連続する最も古い例は、平鹿遺跡で出土した大洞C2期の蓋であることは上述した(第4図1)。共伴した他の精製土器(第4図2~6)は、基本的に磨消縄文によって文様が構成されているのに対して、1の蓋は沈線・彫り込みによって文様が描かれ、地文縄文が欠けている。大洞C2期には、磨消縄文を伴わずに沈線文のみによって文様が描出される例が稀にみられ、その文様構成は入組文や渦文の場合が多く、磨消縄文土器の文様構成とは大きく異なる。このことは、蓋の文様が通常の土器文様とは異なる装飾体系の中で採用されていることを示していよう。

また、磨消縄文土器には、稀に底部外面に文様を施す 例があるが、その文様構成も上述した入組文・渦文が中 心である(第9図1)。土器底部に文様を描く例は、晩期 初頭から連綿として続いており、底面が平滑なためか、 文様を「十字」に4単位、もしくは「一文字」に2単位 に分割する例が多い。縦位に2単位もしくは4単位区画 する点は、蓋の区画に非常によく似ていると感じるのは 筆者だけであろうか。少なからず関係があることを念頭 において、底部に文様をもつ土器について以下みていき たい。

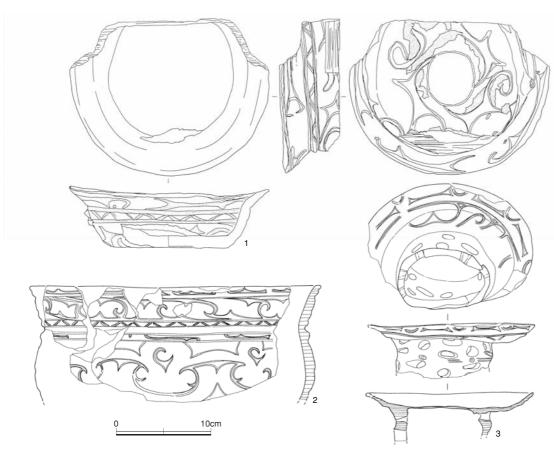
底面に文様をもつ土器は、「亀ヶ岡式土器」では壺・浅 鉢・注口土器などで比較的多く見られ、大洞B~C1期 には、胴部と同様の文様(菱形文や雲形文など)が描か れる。

それに対して、晩期後半になると大洞C2期以降、胴部文様とは異なった文様が描かれるようになる。その文様が、上述した入組文や渦文・同心円文である(第9図1・2)。後続する大洞A1期以降に至っては、十字区画文が盛行し(第9図3・5)、胴部文様とは全く乖離した文様を描き出すようになり、晩期前半期の様相とは大きく異なる。

このような底部に十字区画文などの文様を施す類例 は、東北地方に限らず、日本海側の浮線文土器分布圏に も広く分布している。近隣では、新潟県青田遺跡(第9 図7 荒川ほか2004)で出土し、さらに西に目を向ける と、新潟県田上町保明浦遺跡(第9図9 田畑2003)や 石川県松任市乾遺跡 (第9図12 岡本2001) にとどまら ず、島根県智頭枕田遺跡(第9図13 設楽2004)にまで 分布している。その多くが、小形の浅鉢に施される。い ずれも胴部文様とは異なる文様を施しており、東北地方 の例と文様構成が共通していることがわかる。第9回 7・12には口縁部に、補修孔ではない二個一対の穿孔が 施されており、上述した東北地方の蓋と共通する要素を 持つ点で非常に興味深い。青田遺跡の小形鉢の区画文内 には、浮線文が描かれており、胴部文様と共通する要素 を持つ点で東北地方とはやや異なる。同じような例は、 福島県荒屋敷遺跡の注口土器にも見られる(第9図6)。

また、時期は降るが、畿内地域の弥生土器の壺底面に 文様を描く例が古く小林行雄によって指摘されており、 晩期後半の文様構成が受け継がれている可能性を指摘で きる。(末永ほか1943 第9図14・15)。

では果たして、晩期を通して胴部と底部文様の関係の 変化はいかにして起こり、どのように展開していったの



第10図 是川中居遺跡出土の木胎漆器

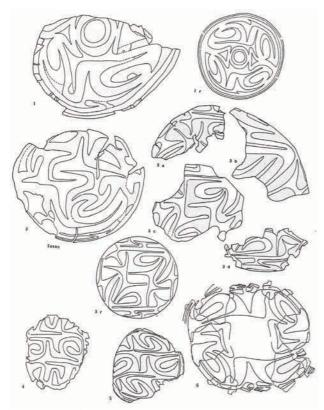
であろうか。また、各地域によってどのような独自性を 有していたのであろうか。この問題を解きほぐすには、 木胎・籃胎漆器などの植物質容器や陶胎漆器との関連を 考えなければならないようである。

## b. 土器と漆器の関係—変化するその関係の強弱—

底部まで有文にする容器は、土器に限らず陶胎漆器や 籃胎・木胎漆器などの植物質容器にも多くみられる(第 10図)。古くから土器と植物質容器の関係は指摘されて おり、土器の底部を方形にして、その四隅を突出させる 形態が、カゴ容器などを模倣して製作したためにできあ がったとする説がその代表例である(甲野1976)。出土し た籃胎漆器の形態などから考えても、この説の蓋然性は 極めて高いが、果たして漆器など植物質容器の模倣は、 「亀ヶ岡式土器」全般を通じて同じ動きを示しているので あろうか。土器だけをとってみても、晩期初頭と末葉で は同じ時期区分をしてよいのかと思う程にその様相は大 きく異なっており、その模倣の仕方も各時期によって異 なる可能性が高い。この関係を見極めるためには、各時 期における土器・漆器の形態・文様・装飾方法などを相 互に検討し、模倣されている要素とされない要素を抽出する作業が必要である。

まず、晩期前半の 例をみてみよう。晩 期前半で多種類の材 質比較が可能な遺跡 は、八戸市是川中居 遺跡に代表される。 是川中居遺跡から は、古くに籃胎漆器 が出土し、さらに近 年の調査では、多く の籃胎・木胎漆器が 出土して注目を浴び ている(宇部・小久 保2002、村木ほか 2005)。第10図1は、 木胎漆器の鉢であ

る。上述したような四隅突出の底部をもち、木胎部を彫 り込んで文様を描き、全面に赤漆を塗布している。木胎 漆器の場合、底部を方形に仕上げる必要性はないので、 木胎漆器にも籃胎漆器の底部模倣現象がみてとれる。た だし、籃胎から木胎への影響関係はみられるが、木胎か ら籃胎への影響関係は現状でみられない。籃胎漆器の場 合、素材に凹凸があって脆弱なため、木胎漆器のように 文様を彫り込んで描出することはできないのであろう。 では、木胎漆器と土器との関係はどうであろうか。両者 の器形・文様を見たときに、どの属性を比較してみても、 見た目は全く変わらない。両者共に、彫り込んで三叉文 や菱形文などの文様が描かれ、器面全体が漆で覆われて いる。唯一の相違点は、陶胎か木胎かの差だけである。 第10図3の台付浅鉢の脚部には、透かし孔が穿たれ、こ れも土器へと忠実に模倣される。つまり土器(陶胎漆器) と木胎漆器とでは、全ての属性において相互の属性交換 現象が起きていることになる(第15図模式図上段)。この 現象については、関東地方の角底土器を分析した阿部芳 郎によって「土器(陶胎)、籃胎、そして木胎容器群の中 に、それぞれの容器の連鎖・変容・型式化とういう現象



第11図 籃胎漆器の文様構成(須藤1996より転載) が実在する」(阿部2004) といった指摘があり、「亀ヶ岡 式土器」前半期の特異性と捉えることができる。

次に、晩期中葉(大洞С1・С2期)の例をみてみよ う。大洞 C 2 期になると、黒地赤漆の彩文描出が特徴と して現れるようになる (第11図 須藤1996) (注12)。彩文手 法は、容器の素材そのものを彫り込むことなく文様を描 くことができ、籃胎漆器などの薄い素材の容器にも文様 を描くことを可能にしたようである。土器に描かれる文 様も、大洞 C 1 期では前段階同様に彫り込んで雲形文が 描かれるのに対して、大洞 C 2 期になると彫刻手法では なく沈線と縄文のみの沈線手法で文様を描くようになり、 彩文の出現が土器の文様描出手法の変化と連動した動き であった可能性を指摘できる。赤漆塗布の仕方も同様で あり、晩期前半同様に大洞 C 1 期では文様の凹凸に係わ りなく全面に塗布するが、大洞C2期になると部分的 (縄文部のみ) に赤彩を施すこともあり、赤と黒のコン トラストがはっきりとしてくる。ここにも土器文様の変 動と赤彩の出現が強い関連をもっていたことを窺わせ る。また、大洞С1期の文様(雲形文)は、晩期前半同 様に、磨消縄文手法ではなく、無文地に文様を描く例が 多々みられ、台付浅鉢の脚部にも透かし孔などが施され、 木製容器(木胎漆器)との関係性が依然として指摘できる。

籃胎漆器に彩文を施した例は、亀ヶ岡遺跡(第11図1) や山王囲遺跡(第11図2・3)で出土しており、両者共 に浅鉢の内面に曲線的な文様を描いている。内面にまで 彩文を描くという手法は、土器にも稀にみられ、文様描 出手法において共通性がみられる。

しかし、籃胎漆器と土器との間に相違点が多く見られるのも事実である。籃胎漆器の文様を分析した須藤隆は、「土器型式と籃胎漆器の文様の複合の仕方、すなわち文様要素の構成、その配列、施文方法などが異なり、土器と籃胎漆器は異なった固有の装飾体系をそれぞれ確立している」とし、「籃胎漆器の彩文意匠は、東北地方の晩期3、4期に発達する土器の雲形文の意匠構成とは明らかに異なっている」(須藤1996)と述べ、彩文の特異性を強調している。

陶胎漆器の代表例である第12図は、全面を文様帯とする壺である。この土器については後述するが、文様構成や底面の形態・文様施文などから考えて、該期の壺としては非常に異質な印象を受ける。特に底部と胴部の文様が連続して描かれている点は、通常の土器にはみられない文様構成である。これらのことから考えると、彩文手法自体は土器・漆器の両者で共通した要素でありながらも、彩文独自の文様や描き方・器面の使い方が存在していると考えられる(第15図模式図中段)。

最後に晩期後半の例をみてみよう。該期には、これまでみてきた籃胎漆器はあまり出土しなくなる。宮城県根岸遺跡・山王囲遺跡で出土しているだけで(須藤1996)、管見では他に類例を知らない。籃胎漆器製作の後退がみられる時期である。晩期後半の土器文様は、「工字文」や「匹字文」といった、直線的な文様が主流であり、晩期前半からみられる曲線的な文様とは大きく異なることから、土器の文様と漆器(彩文など)の関係が非常に希薄になってきたことを示唆している。

該期において、土器と植物質容器との関係を示すものとしては、角底部に描かれる十字文がある。この文様は、植物質のカゴを編む際に添える軸(米の字編み・菊底)を模倣したものと考えられている(第9図3・5 甲野1976、藤沼・小川2006)。この底部形態を具体的に示す植物質容器の実例は、残念ながら亀ヶ岡文化圏では出土していないが、石川県御経塚遺跡で晩期前半の編み物の圧痕が検出されている(高堀ほか1991、渡辺1994)。となる





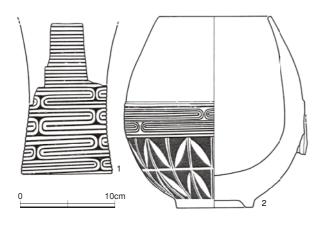


第12図 亀ヶ岡遺跡出土の陶胎漆器(黒地赤彩、小川忠博氏撮影)

と、これまで漆器と土器が互いに属性を交換し、強い関係を有していたのに対して、晩期後半になると、土器は籃胎漆器の編み方、つまり植物質容器の素材そのものを摸倣し始めることになる(以下「素材模倣現象」と呼称)。そして、単純に模倣するだけではなく、土器製作の中で独自の模倣形態をとることになる。当初、籃胎漆器の底部を忠実に模倣していたが、該期になると明らかに模倣の度合いを超えた、四隅柱状脚の底部が出現するようになる(第9図5・6)。つまり、素材模倣現象を取り入れながらも、土器独自の形態を取るようになる時期と考えられる。

では木製容器との関係はどうであろうか。現状で東北 地方における晩期後半の木製容器の出土例は未見だが、 参考までに奈良県唐古遺跡で出土した弥生前期の筒状木 製容器を見てみると(奈良国立文化財研究所1993)、直線 的な工字文(流水文)が彫刻的に描かれており(第13図 1)、木製容器と工字文が深い関係を有していることが 分かるであろう。また、第13図2の木製壺は、胴部中央 に工字文を、胴部下半には彩文で木葉文を描いている。 彩文による木葉文は、西日本において該期の土器文様に 積極的に採用され、描出手法を変えて沈線で描かれる場 合も多々ある。それに対して、木製容器に彫刻される工 字文は、土器文様として採用されることはまずみられな い (注13)。この現象は、西日本前期弥生土器において、彩 文と土器文様の間で強い影響関係を持つようになるのに 対して、木製容器独自の文様(工字文)は土器文様と関 係性が希薄であったことを示している。

それに対して、東日本縄文晩期後半では、土器文様と して直線的な工字文が主流となり、彫刻文が施される木 製容器(容器だけに限らず木器全般の傾向)との関連性 が指摘できるのである。つまり、西日本弥生前期土器と は異なり、東日本晩期後半の土器は、木製容器の彫刻文



第13図 西日本弥生前期の木製容器

様と強い関係性を持っていた可能性が高い。また木製容器には、文様が施されない場合が多いのも特徴的であるが(白木製品)、文様を施さずとも、容器表面に見られる木目(年輪)自体が文様の役割を担う場合もあるのではないか。この「木目文様」は、直線的な文様にもなり、また曲線的な文様にもなりうるものであって、素材そのものを模倣(「素材模倣現象」)するようになった晩期後半には、「木目文様」さえも模倣の対象となった可能性さえある(第15図模式図下段)。

通常木製容器を製作する場合、縦木取りで行なわれる。その際には、底部に限らず不規則に同心円(年輪)や矢羽根状の模様が残る。その同心円を模倣した可能性は、底部に施される第9図9や後述する第17図6から読み解くことができる。底部に施される渦文も同様の現象かもしれない。また、同心円が体部に施される蓋(第7図1~4・6・7・9~11・13)も同様のものと考えられる。

#### c. 蓋と植物質容器の関係

長く土器と植物質容器の関係についてみてきたが、結 論から先に述べると、晩期後半の蓋は植物質容器と強い 関連性をもって成立したと考えられる。

蓋が盛行しない晩期前半期には、土器に類似する植物質の蓋は出土していない。このことは、土器の蓋が独自に成立していたことを示している。該期の土器蓋は、上述したように非常に小形で、形態的には縄文後期前半の土器蓋と非常によく似ており、植物質容器との関連を指摘することはとてもできない。

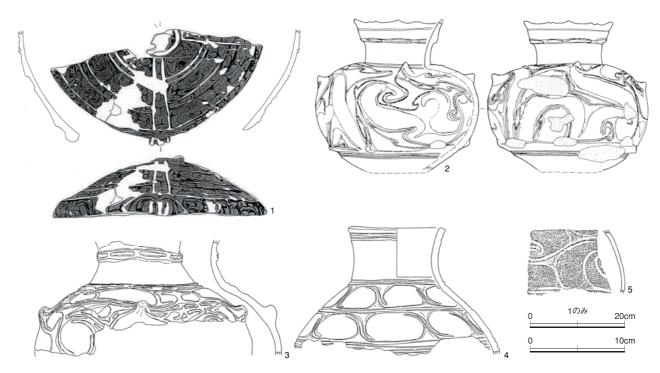
彩文が盛行する大洞C2期の蓋(第4図1)は、通常の土器文様とは異なり、入り組んだ曲線的な文様が描かれ、その文様構成は、上述した籃胎漆器の文様に非常に

よく似ている(第11図参照)。稀に、該期の土器底部に同様の文様が施される例も見られ、おそらく底部有文の土器と籃胎漆器の文様などが融合した形で、成立したものであろう。2・4単位区画を行い、同様の曲線的な文様を施す遺物として土版や岩版がある。また、隆起区画は該期の土偶に見られるものと非常によく似ており、籃胎漆器も含め、祭祀遺物と強い関係を有していることも指摘できる。

晩期後半に至っては、隆起区画がさらに盛行し、同心 円文や綾杉文のような通常の土器にはみられない文様を 施すようになる。これらの文様は、籃胎漆器の文様構成 の範疇からは大きく外れた文様原理であり、上述した木 製容器によく見られる文様(「木目文様」)の範疇で理解 されなければならない。素材模倣現象が起きる該期に は、木製の蓋が存在する可能性は非常に高く、その形態 を土製の蓋が模倣していた可能性が高いのである。

このことを示唆するものとして、東北地方とは遠く離れた、高知県居徳遺跡で出土した木胎漆器の蓋を例にとろう(佐竹ほか2003 第14図1)(注14)。居徳遺跡は、晩期後半(大洞A1期)の大洞式土器が多く出土したことで著名であり、晩期後半の広域な地域間関係を示す遺跡で、木胎漆器の蓋についても東北地方との関係を考慮しなければならない(注15)。この蓋には、彩文で曲線的な文様が描かれており、これまでみてきた亀ヶ岡式土器の彩文(第11図)とは文様構成において大きく異なる。その文様構成については鈴木正博によって分析が加えられ(鈴木2000)、福島県羽白C遺跡(第14図2 鈴鹿ほか1988)の特殊壺と関連があるとされている。

しかし、ここで注目するのは、彩文ではなく、その形態である。全体の半分程度しか残存していないが、つまみ部から放射状に隆起帯(匙面隆帯)で十字区画をしていることがよくわかる。この区画は、上述した東北地方晩期後半の4単位隆起区画とよく類似する(第7図14)。また、隆起区画を繋ぐように同心円状に匙面隆帯が作出されており、匙面と沈線の違いはあるものの、同様に第7図14と非常によく似ている。彩文だけを比較してみると、居徳遺跡の彩文と東北地方の土器の蓋に施される文様は明らかに異なっており、晩期後半期では彩文と土器文様の間に関連性が薄いことが分かるが、素材の形態・装飾に類似点があることが理解できる。これは、上述し



第14図 居徳遺跡出土の木胎漆器と関東型特殊壺

た素材模倣現象を踏まえれば、容易に解釈が可能であり、 晩期後半の蓋が木製の蓋と強い関係を有していたことが 理解できよう。

居徳遺跡の彩文との関連が指摘される羽白C遺跡の特殊壺の類例は、福島県~関東地方(浮線文分布圏)を中心に分布しており (注16)、「亀ヶ岡式土器」分布圏と日本海域の浮線文分布圏では出土しない。この地域には羽白C遺跡例と様相の異なる特殊壺が分布していることが注目される。ここでは、便宜的に羽白C遺跡に類似する特殊壺を「関東型特殊壺」とし、東北地方に分布する特殊壺を「東北型特殊壺」と呼称することにしよう。関東型特殊壺は、彩文を土器文様として採用した壺であることは明らかであり、千葉県志摩城跡において大量に出土している(第14図3~5 荒井ほか2006)。方形状の文様単位(第14図4)も、彩文と共通する要素である。

それに対して東北型特殊壺は、彩文の模倣が全く見られずに、むしろ土器文様と強い関係にある点で興味深い。この東北型特殊壺は、文様・装飾において該期の蓋と極めて良く類似しており、素材模倣現象を考慮すれば、蓋同様に植物質容器、特に木製容器と密接な関係を持っていた可能性が高いのである。よって、次に特殊壺の分析を行うことで、蓋と対になる「身」の容器について考えていきたい。

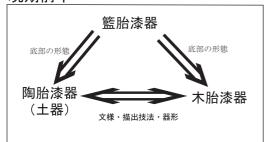
# 2. 身としての特殊壺―特殊壺が「特殊」足る所以―

#### a. 東北型特殊壺

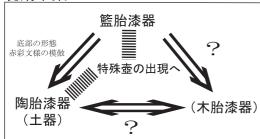
第Ⅲ章3節で、平鹿遺跡の蓋を例にとって、大洞C2期には小形の深鉢か壺がセットとなる可能性を指摘した。しかしながら、深鉢や壺は、該期の土器組成中で大半を占めるのに対して、蓋は1遺跡数点しか出土しない例がほとんどである。つまり、身と蓋の数量比は全く異なっており、セット関係としては不釣合いである。果たして1個体の蓋が、他の様々な土器へと使いまわされたのであろうか。蓋という器種がこれまで異形・珍品として扱われてきた大きな理由はここにある。

前節で、蓋に施される文様が非常に特殊であることを述べてきたが、同様の文様構成をとる土器が存在することに、ここでは注目する。それが上記した東北型特殊壺である。東北型特殊壺は、隆起区画によって文様単位が区画され、その多くは区画内に同心円文や綾杉文を充填する。隆起区画を持たない特殊壺もあるが、それらの多くは器面全体を文様帯とすることに大きな特徴があり、特殊な容器である陶胎漆器と共通する要素である。また、稀に楕円形を呈するもの(第16図16・第17図6)も存在するが、「平面形を楕円や非対称にする発想は木製食器特有のもの」(字野1996)と考えられており、その特異性は際立っている。

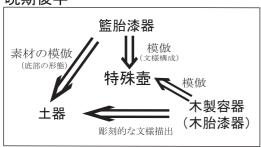
# 晚期前半



# 晚期中葉



## 晚期後半



第15図 素材間の関係模式図

特殊壺が文様構成において蓋と共通性をもつことに、身として機能していた可能性を指摘できる理由の一つであるが、最大の理由はもう一つある。それは、口縁部の穿孔である。口縁部形態は無文で短く直立、もしくは内傾する場合が多く、同時期の壺とは一線を画している。穿孔の数や方法は様々であるが、口縁部全周に等間隔に廻るものと、二個一対の穿孔が2単位か4単位廻るのが基本的な穿孔方法のようである。これらの穿孔の多くは焼成前穿孔であり、土器製作の段階で、穿孔を利用することが想定されていることがわかる。口縁部に穿孔が施される例は、西日本の弥生土器の壺に多々みられ、穿孔のある壺蓋と組み合わさることが分かっている。このようなことから考えると、本稿で対象とした蓋とこれから見ていく東北型特殊壺は、組み合わせ関係の土器として製作・使用されていた可能性が高いと考えられる。

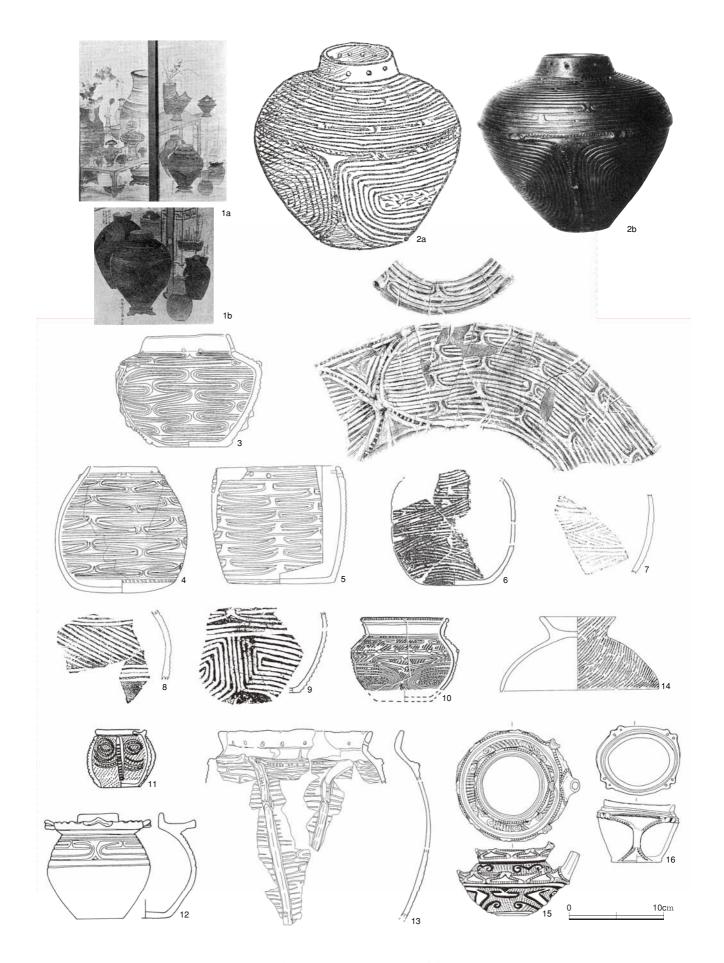
これら東北型特殊壺は、その特異さからか、古くは蓑 虫仙人による亀ヶ岡遺跡出土土器を表した屛風絵にも描 かれ (第16図1 a·b 杉山1967、清水1959)、また、若林勝邦や杉山寿栄男によって青森県十面沢遺跡の特殊壺も報告されている (第16図2 a·b (注17) 杉山1923)。いずれも、口縁部全周に穿孔を施して、胴部の文様帯を上下2段に分割し、上段には工字文を、下段には隆起区画で2単位(推定)の区画を行って、内部に工字文や矢羽状文を施文している。胴部下半の隆起区画には、上述した蓋の「三角状区画」をも形成しており、強い関連性がみられるのである。

特殊壺の初現は、大洞A1期であり、現状で大洞C2期以前のものは見当たらない。大洞C2期では、蓋受けと考えられるような口縁部形態をもった壺が出土しているが(第16図11·12)、口縁部の穿孔が見られない点で東北型特殊壺とは異なる。11は、キザミをもった縦位の4単位隆起区画を作出し、同心円文を描く点で後続する特殊壺と関連するかもしれない。ラフな隆起区画とキザミは、第5図1~3の安堵屋敷遺跡の蓋ともよく似ている。

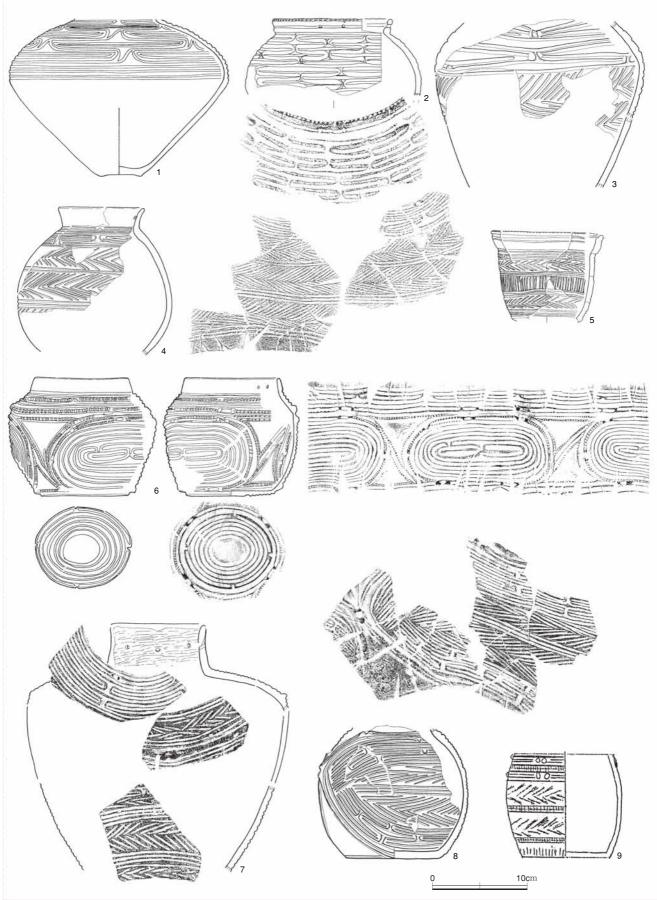
大洞A 1 期のつなぎ II 遺跡の特殊壺 (第16図16) は、楕円形に作出されており、木製容器との関連が指摘できる。文様が描かれない点で、白木製品を模倣した可能性も考えられる。穿孔は、隆起区画上の突起へ縦方向に施されており、やや特殊な穿孔方法である。因みに第16図14~16は土坑一括資料であり、注口土器から判断すると大洞A 1 期として問題ないであろう。この3個体は土坑内に土器片を敷いた上に、14の粗製台付鉢が15の注口土器と16の特殊壺に被さった状態で出土している(高橋・高橋1980)。また、土器の周りを粘土で覆い、土坑を人為的に埋め戻した可能性が指摘されている。この出土状態は、特殊壺が「特殊」に扱われたことを示唆していよう。

大洞A 1 期の他の好例としては、青森県弘前市薬師 (Ⅱ)遺跡で出土している(第16図3 田村1968、藤沼・小川2006)。短頸の口縁部には、二個一対の穿孔が2単位空けられている。胴部は、キザミをもった隆起区画で1単位区画を行い、その内部には工字文を多重に描いている。隆起区画間には三角状区画が上下対向して作出されている。この一単位の隆起区画の例は、第4図1の平鹿遺跡の蓋と同様である。大洞A 1 期の工字文の採用は、該期の蓋にもみられ(第6図3~5)、身と蓋の文様装飾原理が連動していることがわかる。

ただし大洞A1期には、第17図2のような穿孔をもっ



第16図 東北型特殊壷集成(1)



第17図 東北型特殊壷集成(2)

た短頸壺も存在している点は、蓋と身のセット関係を考える上で、注意しておく必要もある。

大洞A2期のものは、山王囲遺跡V層出土土器が著名である(第17図6 伊東·須藤1985)。須藤隆は、この特殊壺に対して「浮線渦巻文の短頸広口壺がこの蓋とセットになると考えられることから、砂沢式の蓋付き注口土器は、晩期後半の蓋付き短頸壺の伝統を受けたものとみられる。これまで、田舎館式期の蓋に代表される東北地方北半で知られていたこの型式の蓋は、その起源を亀ヶ岡文化のなかに求めることができる。なお、従来、広口壺とみられてきた浮線渦巻文土器は、注口土器である可能性がきわめて強いと考えている」(須藤2000)と述べているが、集成した資料を見る限り、注口部の付いたものは見当たらない(注18)。確かに、短頸の口縁部だけを見ると、砂沢遺跡出土の注口土器に類似しているが、文様系統において両者は全く異なるものである。

しかしながら、東北型特殊壺から弥生の注口土器へと セット関係が変化した可能性もある。セット関係の変化 によって、東北型特殊壺が弥生時代には姿を消すことも これで理解できるが、晩期末から弥生時代前半期になる と、注口土器の存在は希薄となり、全ての弥生の壺蓋が 注口土器とセットになるとは考えられない。砂沢式に後 続する弥生中期(五所式~田舎館式)においては、壺と セット関係をもっていることからも(林1966)、他器種 (特に穿孔をもつ壺)との関係についても積極的に考慮す べきと考える。同様のことは、晩期のセット関係につい ても言えることである。

山王囲遺跡の特殊壺は、つなぎⅢ遺跡(第16図16)と同様に楕円形を呈する点に特徴があり、木製容器との関連性を指摘できる。素材模倣現象の起きた該期であるから、底部には木目を表現したと思われる同心円文も描かれている。同じ底部形態(楕円・木目文)は、浮線文分布圏の鳥屋遺跡でも出土している(第9図8 関ほか1988)。

また、単位文間の三角状区画が、上下ズレて描かれている点は注目すべきである。このように上下をズラす文様構成は、第17図1のような大洞A1期の工字文にしばしばみられ、これと関連する可能性がある。しかし、別の視点に立ってみると、彩文の文様構成とも類似するのである。第12図の模式図をみると、単位文の連結部分

(黒地部分)が上下にズレて陥入し、単位文は渦文を描いており、基本的な文様の配置関係が第16図16と同様である。他の彩文も同様である(第11図3~6)。そもそも、縦位に文様を区画することは、通常の土器文様にはみられない。三角状の文様は、第11図1の単位文間にもみられ、共通する要素であり、第12図のような全面を文様帯とする壺が特殊なる位置を占めるならば、東北型特殊壺との関係も考慮に入れなければならないだろう。しかし、両者で文様構成には大きな違いがみられるため、部分的に属性交換を行っているだけと判断する。

山形県花ノ木遺跡では、隆起区画内部を工字文と綾杉文で埋め尽くす特殊壺が出土している(第17図8 今田2000)。三角状区画は、山王囲遺跡と異なり対向して作出されている。口縁部の大半が欠損しており、穿孔の有無は確認できないが、おそらく薬師(II)遺跡・山王囲遺跡の例と同様に、穿孔をもった短頸の口縁部が付くものと考えられる。

岩手県大橋遺跡では、口縁部全周に穿孔を施す大形の壺が出土している(第16図13)。大形のためか三角状区画が縦方向に間延びしており、内部にまで文様が描かれている。隆起区画間を多条の沈線で繋ぐ文様は、第7図14とよく類似するが、部分的に反転し、工字文状に描かれている。大洞A1~A2期の資料と考えられる。

上述した亀ヶ岡遺跡(第16図1)・十面沢遺跡(第16図2)の土器は、文様帯が上下に分かれている点で、山王囲・花ノ木例とは一見して異なる。しかし、隆起区画や文様構成(同心円文・綾杉文)・口縁部穿孔などにおいて、東北型特殊壺と共通する要素を多分に併せ持ち、東北型特殊壺の範疇で捉えるべきと考える。おそらく山王囲・花ノ木例に後続する特殊壺と考えられる。同心円文の中央部には、帯状の綾杉文を施文しており、類例は九年橋遺跡で小形の壺が出土している(第16図10)。同様の特殊壺は、花ノ木遺跡で破片ながら出土している(第17図7)(注19)。

大洞A'期のものとしては、岩手県大船渡市長谷堂貝塚の特殊壺がある(第16図6 金子ほか1999、鈴木2000b)。隆起区画は確認できないが、第17図8とほぼ同様の文様構成である。8と比べて沈線化が進んでいるようである。鈴木正博は、大洞A'式としているが、RZ03(埋設土器)で共伴した土器は、主文様帯下に胴部横帯文



第18図 北陸地方の特殊壺

が施されており、弥生前期まで下る可能性もある。

以上、隆起区画をもった東北型特殊壺についてみてきたが、隆起区画をもたない特殊壺も存在することは注意すべきである。それは器面全面を文様帯とする壺で、これらの多くは、文様帯を多段に設定し、綾杉文や工字文を描いており、明らかに一般的な土器の文様帯構成とは異なっている。

秋田県上新城中学校遺跡では、肩部に工字文(隆線流水状工字文)を、胴部に綾杉文を3段描く特殊壺が出土している(第17図4)。肩部文様から判断すると大洞A2期であり、口縁部には4ヶ所(推定)穿孔が施されている。綾杉文を横位に描く例は、他の遺跡でも破片レベルでも散見され、同様の特殊壺であったことが推測される(第16図7・8)。また、第16図9のように縦位に文様を区画して、重四角文を描く大洞A,期の土器は、言うまでもなく、これまで見てきた東北型特殊壺(第16図1・2・10、第17図6)の流れで追うことができる。

全面を文様帯として多段化する例は、青森県沢山(1)遺跡でも出土している(第16図4)。最大径が胴部下半にあり、下膨れになっている点でも上新城中学校遺跡と同様である (注20)。青森県剣吉荒町遺跡では、頸部の付かない例も出土している(第16図5)。両土器には、穿孔が二

個一対な点で東北型特殊壺と共通するが、文様は一般的な土器文様(隆線流水状工字文・流水型変形工字文 佐藤2008)を描く点で異なる (注21)。いずれにしても、口縁部の穿孔・全面文様帯 (多段化) などの点で、東北型特殊壺と共通する要素をもっており、無関係ではないだろう。

宮城県巻堀遺跡では、全面を文様帯とする小形の深鉢が出土している(第17図5)。共伴する遺物から、大洞A2期と判断でき、既に鈴木正博によって注目されている土器である(鈴木2002)。文様帯構成が上新城中学校遺跡(第17図4)と共通しており、壺ではないが関連性を指摘できる。

このように晩期後半において、口縁部の穿孔・文様の 多段化・綾杉文・隆起区画などに注目すると、東北型特 殊壺とそれに類する土器の間で、一般の土器にはみられ ない、独自の文様・装飾体系を有していたことがわかる。 この現象は、上記した蓋にもみられ、同様の文様・装飾 体系の中で製作・使用されていたことが窺えるのであり、 両者のセット関係を強く物語っている。

#### b. 関東型・北陸型?特殊壺

次に、所謂「亀ヶ岡式土器 | 外殻圏でみられる特殊壺

についてみてみよう。上述したように、同時期の東北南部(福島県)・関東地方には、浮線文土器圏が拡がっており、東北型特殊壺とは異なる特殊壺(関東型特殊壺)が分布している。関東型特殊壺(第14図2~5)は、鈴木正博によって彩文との関連が明らかにされており(鈴木2000)、素材模倣現象の起きた東北型特殊壺とは異なる装飾原理であることがわかる。また、口縁部の穿孔もみられない点で、両者を直接的に結びつけることは難しい。

しかし、同じ浮線文土器分布圏において東北型特殊壺 と関連する土器が出土する地域がある。それが日本海側 の新潟・石川を中心とした地域である。この地域は、上 述した底部有文の土器が出土する地域とほぼ同様の範囲 でもある。

第18図 1 · 2 は、新潟県青田遺跡出土の特殊壺で(荒川ほか2004)、隆起区画内に下向き「コ」字文を幾重にも描く。隆起区画にはキザミが施されないが、東北型特殊壺と非常に強い関係を有することを示唆している。

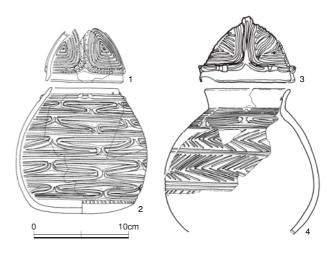
同じく新潟県和泉A遺跡(第18図3)や保明浦遺跡(第18図4)では、縦位に帯状の綾杉文帯を描く壺(深鉢?)が出土している。一見するとこの土器の器形は、東北型特殊壺とは大きく異なる。しかし、文様構成を見てみると、帯状の綾杉文帯は、東北型特殊壺と同様のモチーフであることに気付く。また、綾杉文に注目すると、綾杉文の方向を、途中で変化させる点で、花ノ木遺跡例(第17図7)とも共通する。

縦位の帯状綾杉文は、石川県乾遺跡でも出土しており (第18図5)、土器内に同心円文と同居している点で、東 北型特殊壺との関係を示す。乾遺跡の特殊壺の文様は、 東海・中部地方の「浮線渦巻紋系土器」や「沈線紋系土 器」と共通する要素を持っており(永井1994)、東北と北 陸・中部の特殊壺同士で、広い範囲での議論が可能とな る。この点にいち早く注目した鈴木正博は、綾杉文の分 析から広域な検証作業を行なっている(鈴木2003 a・b)。

#### c. 組み合わせの検討

以上、蓋と東北型特殊壺が、文様・装飾体系において 共通する要素を持っていることを確認し、両器種の分布 範囲がほぼ同じであり、両器種はセット関係にある可能 性が高いことを確認してきた。

問題となるのは、両器種が実際に組み合うのかという



第19図 蓋と特殊壺の組み合せの一例

ことである。残念ながらそれを示すような状態で出土した例は一例もないので、ここでは、両器種が出土した遺跡での組み合わせを確認すると共に、集成した蓋と特殊壺の口径比較を行って、セット関係の蓋然性を確認してみたい。

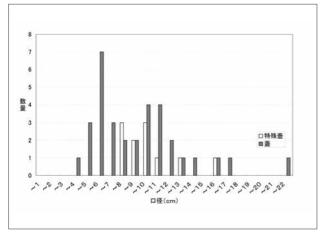
両器種が共に出土した遺跡は、青森県亀ヶ岡遺跡・沢山(1)遺跡・剣吉荒町遺跡、秋田県上新城中学校遺跡、宮城県山王囲遺跡、山形県花ノ木遺跡・蟹沢遺跡の計7遺跡である(第8図参照)。ただし、両器種ともに口径を計測できる遺跡は、青森県沢山(1)遺跡と秋田県上新城中学校遺跡の2遺跡だけである。両遺跡出土土器を組み合わせてみると、第19図のようになる。口径から判断する限りでは、両器種が組み合うことに支障はないようである。

沢山(1)遺跡(第19図1・2)の文様構成は、蓋が 同心円文で特殊壺は工字文(隆線流水型工字文)となっ ており、相違点も目立つが、蓋の隆起区画上の点列と特 殊壺の文様帯下端の点列に共通性がみられる。

上新城中学校遺跡(第19図3・4)では、綾杉文に共通性がみられる。蓋は「Z」字状の綾杉文であるが、こういった綾杉文は同時期の壺に一般的に採用されることから(鈴木2003b)、身と同時期の大洞A2期に位置づけられる。蓋には穿孔が確認できないため、両土器が実際のセット関係を示すとは考えられないが、該期の様相をよく表したセット関係と考えられる。

次に、全ての蓋と東北型特殊壺の口径比較を行なって みよう (表 1)。蓋は大小様々で、口径値にバラつきがみ られるが、 $5.0 \sim 13.0$ cm の間に集中する傾向がある。それ

表1 蓋と東北型特種壺の口径比



に対して特殊壺は、8.0~12.0cm の間に集中しているのがわかり、口径値において非常に近似した関係を有していることが読み取れる。

以上、文様構成の類似点や口径値の近似などから考えて、両器種がセット関係を有していた可能性が非常に高いと考えられる。あとは、セット関係を示した状態で出土することを期待するばかりである。

#### 3. 弥生土器の蓋との比較

本稿で関連する弥生土器の蓋は、「逆皿形(倒皿形)」と「円盤形」の壺蓋である。これらの壺蓋は、甕蓋とは異なり、口径が小さく、天井部に文様を描き、口縁部や天井部に穿孔する点から考えて、これまで見てきた晩期後半の蓋と強い共通性をもち、系統的に連続する可能性が極めて高いのである。

既存の研究においては、須藤隆がこの点について簡単に言及しただけであり(須藤2000)、詳細な分析が行われていないのが現状である。よって最後に、この問題に触れて、本稿を締めることとしよう。

第20図に、東北地方で出土した弥生土器の壺蓋の主なものを図示した。基本的に、大洞A1・A2期で盛行した隆起区画は形骸化し、沈線区画になっている。隆起区画の名残は、砂沢式のつまみ部に部分的に残るのみである。他の資料は、基本的に4単位沈線区画であり、晩期後半の構図とほぼ同様である。大洞A2期の第7図16と第20図2を比較すると、区画文や刺突などで共通する要素を多く持っており、弥生土器の逆皿形の壺蓋が、晩期後半から連綿と製作・使用されていたことが伺える。

高瀬克範は、逆皿形の蓋が出現する要因として、砂沢

式の小形浅鉢(第20図10・11)と、東北南部・北越にみられる放射状沈線を持つ浅鉢(第20図12・13)が融合して成立すると判断している(高瀬2000)。上述したように、逆皿形の蓋は晩期後半の蓋から系統的にトレースすることができ、高瀬が想定するような過程を踏まなくとも、逆皿形の壺蓋は成立すると考える。そもそも、放射状沈線を描く浅鉢は、文様の単位数に決まりがなく(4~6単位と様々)、4単位が基本の逆皿形とは大きく様相が異なる。高瀬が指摘する第20図12・13のような放射状沈線をもつ土器は、晩期後半には既に存在しており(第20図14~16)、その系統として扱うのが妥当であろう(第20図14~16)、その系統として扱うのが妥当であろう(第20図14)。

また、宇鉄遺跡例(第7図17)のように大洞A,期には側面に文様を描く蓋が既に出現しており、第20図10・11のような浅鉢と関連するとしたら、器形のみであろう。

福島県須賀川市松ヶ作A遺跡では、底面に1本沈線で 渦文を描いた弥生前期の浅鉢が出土している(第20図 17)。第20図1の渦文と類似するが、他人の空似であろ うか、関連を指摘するにとどめておこう。

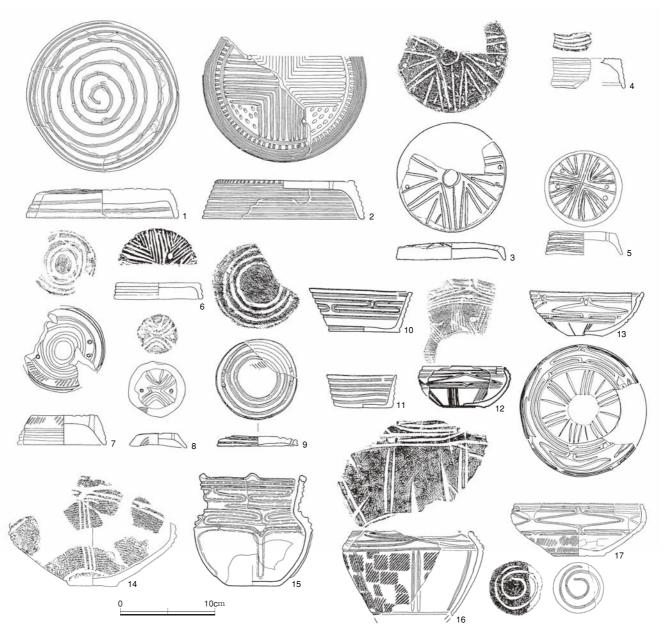
新潟県田上町保明浦遺跡では、4単位沈線区画の蓋が出土している(第9図10・11)。10には刺突も充填され、砂沢式の蓋との関連が考えられ、11も第20図3によく似ており、新潟県域でも弥生前期に逆皿形の蓋が存在していた可能性が指摘できる。

また、宮城県香ノ木遺跡では、大洞A1期の層から逆 皿形の壺蓋が出土していることは既に確認した(第6図 13)。穿孔の位置や天井部の文様(同心円か渦文)におい て、弥生の壺蓋と酷似しており、第7図21なども含めれ ば、既に晩期後半には、逆皿形の蓋が定型化していた可 能性も考えられる。

円盤形の壺蓋については、二枚橋(2)遺跡で、晩期 後半のものと思われる例が出土しているが、弥生土器 (第20図9)のものとは、文様構成において大きく異なる ため、現状で直接的な関連を指摘することは避けておこ う。

## M. おわりに

以上、縄文時代晩期の蓋形土器について、集成を行い、



第20図 東北弥生前期土器の壺蓋と関連資料

若干の考察を行ってみたが、資料の希薄さから、十分な検討を行うことができず、拡大解釈が過ぎたかもしれない。しかし、資料が希薄に感じるのは、決して筆者自身の集成不足ではなく、これが実態を表していると考えられる。上述したように、蓋が出土する遺跡は、各地域を代表する比較的大規模な遺跡であり、小規模な遺跡からは全くと言っていいほど出土していない。これは、蓋を製作し、使用する集団が限られていた可能性が高く、特殊壺とあわせて考えると、出土土器の中での位置付けが、いかに特異なものであるかが理解できよう。

蓋に施される文様は、他器種の土器とは異なり、かなり異質な文様が施されることから、土器への視点だけで

はなく、他の材質を用いた容器との関連も含めて検討を行った。通称「亀ヶ岡式土器」を製作した集団は、籃胎・木胎・陶胎漆器など様々な素材を用いて、容器などの諸道具を製作・使用し、独自の製作・装飾体系が確立していた。そして、それらは相互に模倣し、属性の交換を行っていたことが理解できる。しかし、土器・籃胎・木胎漆器の関係は、縄文晩期を通じて同じ関係であったわけではなく、各時期においてその関係に強弱の変化があったものと考えられる。

そういった遺物間関係の変化の一過程で、蓋と特殊壺 が成立し、セットとして使用されていたようである。器 面全面に装飾を施し、底面にまで加飾する例のある特殊 壺と、その装飾形態に類似性の見られる蓋は、おそらく 他の諸遺物と相互に関連を持ちながら、身と蓋の関係を 強めていき、弥生時代になり土器の一器種として定着し ていったものと考えられる。そこには、西日本からの弥 生土器組成の影響は少なからず存在していたであろう。

弥生土器の模倣(写し)について考察した吉田広は、「土器本来の素材に適った使用形態が貫かれている縄文的食器においては、ヒョウタン・ヒョウタン製容器の形を写し取ることは不要であった」とし、「素材の性質をかなり無視した、強い目的意識的な食器様式を形成することが特徴」的な弥生土器においては、「木製食器と土製食器の写しの関係」が起きることを指摘している(吉田2004)。しかし、これまで見てきたように、少なからず「亀ヶ岡

式土器」製作においては「素材の性質を無視した強い目的意識」が働いており、「写し」現象は頻繁に行なわれていたことがわかる(it23)。

蓋という、これまで珍品扱いされてきた器種に目を向けて論を進め、「身も蓋もない」ような話になってしまった感が否めないが、今後土器研究において、珍品・異形土器のような不問にされることの多かった遺物を、いかに位置づけるかは少なからず大切な作業であろう。

たとえ珍品であろうとも、過去の人類が、それを製作・ 使用していたのは事実である。そこに何かしら彼らの行動の意図・意味が含まれているということを忘れずに、今 後も目を背けることなく向き合っていきたい。

表 2 東北地方縄文晩期後半の蓋出土遺跡一覧

都道府県	市町村名	遺 跡 名	所 属 時 期	参 考 文 献	点数	備考
青 森 県	五所川原市 (旧市浦村)	大沼遺跡	大洞A2期	榊原2001、藤沼・小川2006	1	赤彩
"	三廏村	宇鉄遺跡	大洞A'期	児玉・相馬2004	1	口縁内面漆?
"	むつ市 (旧大畑村)	二枚橋(2)遺跡	大洞C2~A2期	橘ほか2001、藤沼・小川2006	4	
"	佐井村	佐井八幡堂遺跡	大洞A2期		1	
"	南部町 (旧名川町)	剣吉荒町遺跡	大洞A2·A'期	鈴木・木村1988	2	
"	つがる市 (旧木造町)	亀ヶ岡遺跡	大洞A2期	鈴木・岩渕2001	1	
"	青森市	沢山(1)遺跡	大洞A2~A'期	児玉1994	1	
秋田県	秋田市	上新城中学校遺跡	大洞A2期	石郷岡ほか1992	2	
"	横手市 (旧増田町)	平鹿遺跡	大洞 С 2 期	小玉1983	1	赤彩・穿孔
岩手県	奥州市 (旧前沢町)	川岸場 遺跡	大洞A'期?	小山内2000、、及川ほか2004	3	
"	一関市	細田遺跡	大洞A'期	工藤・晴山1999	1	
"	花巻市 (旧鳥谷町)	安堵屋遺跡	大洞 С 2 期	岩手県埋蔵文化財センター 1989	5	
"	大船渡市	宮野貝塚	大洞A1期	佐々木2002、藤沼・小川2006	1	
"	北上市	九年橋遺跡	大洞C2~A1期	藤村1988・91	10	
宮城県	栗原市 (旧一迫町)	山王囲遺跡	大洞A1~A'期?	大場・氷見1998、須藤2000	2	穿孔
"	石巻市	沼津貝塚	大洞С1期	東北大学文学部1982	1	
"	加美町 (旧小野田町)	香ノ木遺跡	大洞A1期	佐々木ほか1985	1	穿孔
山形県	真室川町	釜淵C遺跡	大洞A1・A2期	黒坂	2	
"	最上町	げんだい遺跡	大洞A2期	安部・月山1988	2	赤彩・穿孔
"	尾花沢市	漆坊遺跡	大洞A2期	大類1982	1	
"	村山市	宮の前遺跡	大洞 С 2 期	山口ほか1995	1	赤彩
"	東根市	蟹沢遺跡	大洞A1~A'期?	佐藤1963	1	
"	寒河江市	高瀬山遺跡	大洞A2期	小林2005	1	全面漆塗り・穿孔
"	河北町	花ノ木遺跡	大洞A2期	今田2001	1	赤彩
新潟県	田上町	保明浦遺跡	鳥屋2b式?	田畑2003 · 2004	(1)	穿孔

#### <謝辞>

本稿作成の契機は、寒河江市高瀬山遺跡(HO地区)で出土した蓋形土器について小林圭一氏からご教示頂いたことにあります。小林氏からは晩期土器研究についても様々なご指導を頂きました。また下記の方々には資料調査・文献収集などにおいて多くのご協力を得ました。記して感謝の意を表したいと思います(五十音順・敬称略)。

(個人) 阿部泰之 安藤広道 石川日出志 伊藤才城 稲野裕介 大坂拓 大場亜弥 大類誠 小野隆志 小松正夫 佐藤信行 品川欣也 庄司祐一 西谷隆 日隈広志 向出博之 山口博之 渡邊朋和

(機関) 秋田市教育委員会 河北町教育委員会 北上市埋蔵文化 財センター 慶応義塾大学民族学考古学研究室 田上町教育委 員会 丸亀市教育委員会

なお、本稿は2006年度大久保忠和考古学振興基金奨励研究の成 果を一部含む。

#### <注>

1) 山内が『日本遠古之文化』で指摘している縄文時代の蓋は、 おそらく縄文後期前葉の堀之内式に組成する蓋を指していると 考えられる(山内1940)。

北陸地方で出土する晩期の蓋との関係については、残念ながら山内の論考中で直接確認できないが、山内門下である中村五郎が「かつて山内先生が北陸の縄紋の蓋と弥生の蓋の関係に注目していたことを思い出すのである」と山内本人の見解として回顧している(中村1988)。また、中村同様に山内門下である佐原真は、弥生文化の特質について触れた概説書で、弥生文化を構成するものを、①大陸から伝来した要素、②縄文文化からの伝統として受けついだ要素、③弥生文化で固有の発達をとげたもの、の三要素に分類し、蓋を②縄文文化からの伝統として受けついだ要素として扱い、「晩期に北陸地方の蓋が近畿に伝えられ、近畿で前期中ごろに弥生土器の一器種として登場」(佐原1975・76)するものとした。少なからず山内の考えが影響しているものと考えられる。

- 2) 蓋は縄文・弥生土器に限らず、古墳時代以降の土器・陶磁器にも組成している。これらの蓋は、縄文・弥生時代の蓋とは異なり、土師器・須恵器・陶磁器の中の一器種として一定の役割を担っており、本稿が対象とする縄文・弥生土器における蓋とは、その意味合いが大きく異なることから、今回の分析対象からは外した。
- 3) 弥生土器の蓋についての研究史を振り返った角南総一郎は、 佐藤傳蔵の報告が後年の弥生土器研究に大きな影響を与えたこ とを指摘しており、佐藤の報告は単なる集成作業ではなく、蓋 としての概念を提示した点で非常に重要であろう。

また、角南は同論文において、小林行雄が唐古遺跡の報告で 弥生土器の壺蓋と甕蓋の二者の存在を初めて明らかにした(末 永ほか1943)と述べているが、この見解のプライオリティは森 本六爾にある(森本1934)。

因みに、現在の視点に立てば、第1図6は北海道室蘭出土の 弥生土器(田舎館式)の蓋である。

4)縄文中期の有孔鍔付土器は、土器の開口部を有機物で覆って 結縛した可能性もあるが、否定する見解もある(田代・中川 1982)。否定論者は、有孔鍔付土器を酒造具として捉え、発酵過 程でのガス抜き孔と考えているようである。伊藤正人は縄文後期の蓋と身の関係が、有孔鍔付土器からの系統として成立するとしており(伊藤1990)、筆者もその系統的な変化を考えると有孔鍔付土器にめぐる小孔列は、紐掛けのために機能していた可能性が高いと考えており、「蓋などの緊縛孔と考える余地はないのである」(田代・中川1982)と強く断定する必要性もないのではないだろうか。

また、本稿で対象とする晩期後半の特殊壺や弥生中期前半の壺にも、有孔鍔付土器同様に口縁部直下に孔列を廻らしている例がみられる。このように時期や地域に大きな隔たりがありながらも、共通する形態や属性を有する遺物は、恐らく機能面でも類似した点があったのではないかと考えられる。単純な比較や推測だけではなく、出土状況や土器の観察によって、今後改めてその関係性について考えてみたい。

- 5)報告書において、第3図7の土器についての記述はなく(後藤1972)、報告者が蓋として認識していたかについては、不明である。
- 6) 大洞A2期に帰属する資料として、慶応義塾大学所蔵の佐井 八幡堂遺跡の蓋があることを確認している。2単位隆起区画の 蓋で、流水型変形工字文を縦位に展開する好資料である。器形 は、第5図8の宮の前遺跡によく似ている。この資料について は、近々大坂拓氏が発表予定と聞いているので、その報告を待 ちたい。
- 7) 大沼遺跡の土器は、特殊工字文の構成要素である変形匹字文 が横位に伸びており、大洞A2式でも新しい段階に位置づけら れる可能性が高い。
- 8)報告書内でこの蓋を解説した坂田由紀子は、類例として大日向(II?)遺跡を取り上げている(大場・氷見1998)。筆者が、同遺跡の報告書を何度も確認したが、類例を確認できなかった。筆者が見落とした可能性もあるが、坂田の示した類例は、もしかすると第20図5かもしれない。明らかに沈線区画による弥生土器の蓋である。ご教示願いたい。
- 9) げんだい遺跡の報告者は、この蓋を弥生前期と判断しているが、筆者が他の出土土器を確認したところ、明確に弥生前期として位置づけられるものは1点のみであり(佐藤2006にて報告)、その多くは晩期末葉の大洞A2期であった。よって、これらの蓋を積極的に弥生前期に位置づける根拠は非常に薄い。

また、高瀬克範は、げんだい遺跡から出土した土器について (第7図13)、特殊な小型鉢と判断し、「かりに蓋だとしても、文様・形態のうえで逆皿形蓋とは異質といわざるをえない」と、弥生土器の蓋との関連性を否定している。しかし、第7図13のような土器は、出土遺跡の大半が縄文晩期後半の時期であることから、少なくとも弥生土器の蓋との時間的な距離は大きくない。しかも隆起区画が底部まで施されていることや、その多くが穿孔を有していることなどから考えて、蓋としての可能性を含めて、弥生土器に組成する蓋との関連を考慮すべきと考えている。詳細は後述する。

- 10) 高瀬山遺跡 (HO地区) からは、大洞A2期の土器が比較的まとまって出土しており、蓋の編年的な位置づけを示唆している。大洞A2式については、佐藤2005a・bで若干の検討を行っているので、参照願いたい。
- 11) 法政大学所蔵の川岸場遺跡 (伊藤鉄夫コレクション) でも、破 片資料1点出土している (伊藤ほか1996の p 211、001-37右列 の下から2番目)。

- 12) 晩期前半期で彩文を施した例として、是川中居遺跡の樹皮製容器があげられ、報告者は、出土状態などから大洞BC期としている。この容器に描かれた彩文は、該期の土器にはみられない特異な文様構成であり、彩文独自の文様原理がこの段階で既に成立していた可能性も考えられる。入組んだ文様構成は、後述する大洞C2期以降の彩文と共通する要素である。
- 13) 畿内第 I 様式の土器文様として工字文が採用された著名な例としては京都府竹野遺跡の例がある。
- 14) 居徳遺跡の木胎漆器には、いくつかの穿孔が施され、口縁部の穿孔内に紐状の依存物が残っている点から、報告者は補修孔として判断している(佐竹ほか2003)。しかし、実物は未見だが、東京国立博物館開催の「発掘へんろ一遺跡でめぐる伊予・土佐・讃岐・阿波一」の展示レプリカで観察したところ、欠損していない部分にも穿孔が確認された。よって補修孔ではなく、身と蓋を繋ぐための紐掛け孔である可能性も考えられる。
- 15) 居徳遺跡の木胎漆器の漆技術を分析した永嶋正春は、漆の塗布の仕方や彩文の文様構成などから、大陸文化の影響を想定しているが、具体的な比較・分析が行われているわけではないので、説得力に欠ける(永嶋2006)。
- 16) 晩期後半の特殊壺は、石川日出志や鈴木正博などが既に分析を加えており、晩期後半から弥生時代まで継続的に製作されていることを指摘している(石川2005、鈴木2000・2003 a)。両氏の論考は、いずれも東北地方南部から関東地方の特殊壺を対象とし、主に弥生時代の特殊壺との関係性を重視した研究である。本稿で取り上げる東北地方の特殊壺と両氏の取り上げる特殊壺を同列に比較することはできないが、同時期において広域に「特殊な」壺が展開することは、今後比較・検討の必要性はあろう。本稿は、特殊壺の分析が主題ではないので、別稿で詳しく論じたいと思っている。
- 17) 第16図2 a は若林勝邦氏が亀ヶ岡出土としたもので(若林 1892)、同図2 b は杉山寿栄男によって十面沢遺跡出土と報告された土器である(杉山1923)。口縁部の穿孔や文様・装飾などから、同一個体であると考えられる。『縄文土器のはなし』(筆 者未見、中村1990を参照した)でこの土器を取り上げた甲野勇は、「大洞A式、青森県十面沢」としており、いずれの遺跡出土なのかははっきりしない。

- 同様の土器は亀ヶ岡遺跡でも出土しているが(第16図1)、屏 風絵であることを考慮にいれても、文様や器形などで第16図2 とは大きく異なる。
- 18) 須藤隆は、本稿の「東北型特殊壺」を「浮線渦巻文土器」と呼称している(須藤2000)。しかし、これらの文様構成をよく確認すると、渦文ではなく、同心円文である場合がほとんどであるので、須藤の用いる「浮線渦文土器」の名称は適切ではない。おそらく須藤は、東海・北陸地方に分布する「浮線渦巻紋系土器」や「沈線紋系土器」(永井1994)との関連から造語したものであろう。
- 19) 第17図7の特殊壺は、破片資料から復元したため、器形に若干のズレがある可能性もある。特に、胴下半の破片は、亀ヶ岡・十面沢遺跡同様、同心円文を基本とした曲線的なモチーフであるので、上下左右の判断が誤っている可能性があることを付記しておく。
- 20) 口縁部に孔を有し、下膨れになる器形は、縄文中期の有孔鍔 付土器などと同様であり、土器だけの視点ではなく、他の材質 容器との関連(模倣現象)も考慮しなければならないであろう。 弥生時代の木製容器に、下膨れのものが多いのも興味深い。
- 21) 剣吉荒町遺跡の土器に描かれている文様(縦位に展開する流水型変形工字文)は、注6で述べた佐井八幡堂遺跡の蓋と共通する文様構成である点は注目される。
- 22) 地蔵田B遺跡の土器については、実見した結果、積極的に弥生前期土器として扱えるかどうか判断に迷う。変形工字文だけをみるならば、大洞A'式に位置づけるのが妥当と考える。
- 23) そもそも「最も弥生土器的な写しという行為」は、木製高坏を中心にみられる弥生中期中葉以降の現象であり、その現象を「ひょうたん写し」にまで援用することは、やや論に飛躍がありすぎると感じる。吉田も指摘するように、「ひょうたん写し」の土器は「祭祀的色彩の強さを予測させる」ものであり、「写し」行為が一般化した弥生後半の高坏とは、その製作・用途においては相違点が大きすぎる。むしろ、祭祀的な容器の模倣現象は縄文土器の「写し」行為とよく似ており、「ひょうたん写し」の初現である弥生前期末の段階とも時間的に離れてはいないと感じる。

#### <参考・引用文献>

秋山真吾・藤沼邦彦 2007 「Ⅳ. 東北地方各地の亀ヶ岡文化の遺物について」『弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 5 亀ヶ岡文化遺物実測図集 (3)』 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター pp.155~175.

阿部明彦·黒坂雅人 1991 『山形県埋蔵文化財調査報告書第164集 西海淵遺跡第1次発掘調査報告書』 山形県教育委員会

安部実・伊藤邦弘 1987 『山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 生石2遺蹟発掘調査報告書(3)』 山形県教育委員会

安部実・月山隆弘 1988 『山形県埋蔵文化財調査報告書第128集 げんだい遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会

阿部 豊 1999 『宮古市埋蔵文化財調査報告書54 千鶏IV遺跡—宮古市水産課千鶏地区漁港漁村総合整備事業関係—』 宮古市教育委員会

阿部芳郎 2004 「縄文時代後晩期における角底形土器の研究」『駿台史学』121 駿台史学会 pp.71~94.

荒井世志紀・鬼澤昭夫・黒沢哲郎・戸村勝司郎 2006 『(財) 香取郡市文化財センター調査報告書第99集 志摩城跡・二ノ台遺跡 I ― 経営体育成基盤整備事業島地区に伴う発掘調査報告書―』(財)香取郡市文化財センター

荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉・加藤学・赤塚亨 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調 査報告書Ⅴ 青田遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川日出志 2005 「縄文晩期の彫刻手法から弥生土器の磨消縄文へ」『地域と文化の考古学 I 』 明治大学考古学研究室 pp.305~318. 石川日出志・増子正三・渡辺裕之 1992 『安田町文化財調査報告12 六野瀬遺跡1990年調査報告書―立川ブラインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書―』 安田町教育委員会

石郷岡誠一・安田忠市・納谷信広 1992 『上新城中学校遺跡―学校改築に伴う緊急発掘調査報告書―』 秋田市教育委員会 一迫町教育委員会 1977 『巻堀遺跡』 一迫町教育委員会

伊藤玄三·小倉淳一·田部秀男 1996 「T6胆沢郡前沢町 T6001川岸場」『法政大学所蔵 伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅱ』 法政大学文学部考古学研究室 pp.205~221.

伊東信雄 1985 「東北地方における稲作農耕の成立」『日本史の黎明 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』 六興出版 pp.335~365.

伊東信雄·須藤隆 1985 『山王囲遺跡調査図録』 一迫町教育委員会

伊藤正人 1990 「土製蓋小考―縄文中~後期の関東地方を中心に―」『考古学研究』36-4 考古学研究会 pp.74~92.

伊藤 実 2004 「土器の蓋一弥生土器の甕蓋の効用とその意義—」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』 河瀬正利先生退官記念事業会 pp.375~394.

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1984 『岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第74集 安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器―弥生変革と中世変革―」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器―弥生期から平安期にかけての木製食器―』 埋蔵文化財研究会 pp.7~21.

宇部則保・小保内拓也 2002 『八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集 是川中居遺跡―長田沢地区―』 八戸遺跡調査会

宇部則保·小久保拓也 2002 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集 八戸市内遺跡発掘調査報告書第15 是川中居遺跡 1』 八戸市教育委員会

及川真紀·森一欽·依田恵美子·中野益男 2004 『前沢町文化財調査報告書第16集 川岸場 I 遺跡第 2 次発掘調査報告書』 前沢町教育委員会

大友透·福山宗志 1995 『名取市文化財調査報告書第36集 平成6年度年報』 名取市教育委員会 pp.23~40.

大場亜弥・氷見淳哉 1998 『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 一迫町教育委員会

岡本恭一 2001 『乾遺跡発掘調査報告書 A·C区下層編』 (財) 石川県埋蔵文化財センター

小田嶋知世·菊池寛子·稲野裕介 2004 『北上市埋蔵文化財調査報告第61集 丸子館跡』 北上市教育委員会

小田野哲憲 1983 「岩手県出土の「蓋形土器」について」 『岩手県立博物館研究報告』 1 岩手県立博物館 pp.66~83.

加藤学·荒川隆史 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子昭彦・阿部勝則・工藤利幸 1999 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第296集 長谷堂貝塚発掘調査報告書―県営長谷 堂住宅替代事業関連遺跡発掘調査―』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

菊池徹夫・岡内三真・高橋龍三郎 1996 「青森県虚空蔵遺跡出土土器の共同研究」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42 早稲田大学大学院文学研究科 pp.81~103.

工藤 大ほか 1997 『青森県立郷土館調査報告書第40集 考古-11 馬淵川流域の遺跡調査報告書』 青森県立郷土館

工藤利幸・晴山雅光 1999 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第283集 細田遺跡発掘調査報告書――関遊水地事業関連調査―』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

黒坂雅人 2003 『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集 釜淵C遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター

甲野 勇 1976 『縄文土器の話』 学生社

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1988 『中山地区土地改良共同施行事業関連発掘調査報告書 2 滝ノ口遺跡』 郡山市教育委員会 小柴吉男ほか 1990 『三島町文化財調査報告10集埋蔵文化財調査報告書 V 荒屋敷遺跡 II 《河岸段丘低湿地の遺跡》―国道252号線改良工事に伴う発掘調査報告書―』 三島町教育委員会

小玉 準 1983 『秋田県文化財調査報告書第101集 平鹿遺跡発掘調査報告書』 秋田県教育委員会

児玉大成 1994 「特集 青森市沢山(1)遺跡の出土遺物|『撚糸文』21 青森山田高等学校考古学研究会

児玉大成・相馬俊也 2004 「宇鉄遺跡における縄文晩期中葉~末葉の土器|『研究紀要』 7 青森大学考古学研究所 pp.1~38.

後藤勝彦 1972 『宮城県七ヶ浜町二月田貝塚 (Ⅱ)』 宮城県塩釜女子高等学校社会部

小林圭一 2005 『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集 高瀬山遺跡(H O地区)発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター

小林達雄·小川忠博 1989 『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』 小学館

小山内透 2000 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集 川岸場 II 遺跡発掘調査報告書―北上川上流改修事業(白山築 堤)に係る発掘調査―』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

今田史明 2001 『河北町埋蔵文化財調査報告書第4集 花ノ木遺跡発掘調査報告書』 河北町教育委員会

榊原滋高 2001 『市浦村埋蔵文化財調査報告書第12集 岩井・大沼遺跡―県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告―』 市浦村教育委員会

佐々木和博・古川一明・大槻仁一 1985 『宮城県文化財調査報告書第103集 香ノ木遺跡 色麻古墳群―昭和59年宮城県営圃場整備等 関連遺跡詳細分布調査報告書―』 宮城県教育委員会

佐々木洋 2002 『宮野貝塚緊急発掘調査報告書』 大船渡市教育委員会

笹平克子・小山内透 1994 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集 向館遺跡発掘調査報告書――般県道上米内停車場線整備関連遺跡発掘調査―』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

佐竹寛・藤方正治・下村裕・曽我貴行 2003 『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集 居徳遺跡群 IV — 四国横断自動車道 (伊野〜須崎間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

佐藤傳蔵 1898 「本邦石器時代遺跡より発見せる土製の蓋及蓋らしきもの」『東京人類学会雑誌』143 東京人類学会 pp.167~171.

佐藤信行 1963 「蟹沢遺跡―山形北部に於ける縄文晩期終末の研究―」『村山考古』 7 村山考古同好会 pp.1~17.

佐藤祐輔 2005 a 「砂子田遺跡が投げかける問題」『山形考古』 8-1 山形考古学会 pp.1~32.

佐藤祐輔 2005 b 「縄文時代晩期後葉について」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集 高瀬山遺跡 (HO地区) 発掘調査報告書』 (財) 山形県埋蔵文化財センター pp.369~373.

佐藤祐輔 2006 「生石 2 遺跡をめぐる研究史―「生石式」と「生石 2 式 | ― | 『さあべい』 22 さあべい同人会 pp.26~44.

佐藤祐輔 2008 (未刊) 「変形工字文覚書―変形する「工字文」と変形する「変形工字文」―」『地域と文化の考古学Ⅱ』 明治大学文 学部考古学研究室

佐原 真 1975 「農業の開始と階級社会の形成」 『岩波講座日本歴史』 1 岩波書店 pp.113~182.

佐原 真 1976 「蓋—蓋形土器」『日本の美術125 弥生土器』 至文堂 pp.40・41.

設楽博己 2004 「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根県考古学会誌』20・21合併号 島根考古学会 pp.189~209.

品田高志·平吹靖 2001 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第37集 新潟県柏崎市十三本塚遺跡群·十三本塚北遺跡発掘調査報告書』 柏 崎市教育委員会

清水潤三 1959 『考古学・民族学叢刊第三冊 亀ヶ岡遺跡―青森県亀ヶ岡低湿地遺蹟の研究―』 三田史学会

親跡喬・野村忠司 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』 中郷村教育委員会

菅原俊行·安田忠市 1986 「地蔵田B遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田市教育委員会 pp.11~261

末永雅雄·小林行雄·藤岡謙二郎 1943 『京都帝國大学文学部考古学研究報告第16冊 大和唐古弥生式遺跡の研究』 桑名文星堂

杉原荘介・戸沢充則・小林三郎 1969 「茨城県殿内 (浮島) における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』 4 - 3 東京考古学会 pp.33~72.

杉山寿栄男 1923 『原始文様集』 工芸美術研究会

杉山荘平 1967 「蓑虫仙人小伝」『物質文化』10 物質文化研究会 pp.22~32.

鈴鹿良一ほか 1988 『福島県文化財調査報告書第194集 真野ダム関連遺跡発掘調査報告 X Ⅱ 羽白 C 遺跡 (第 1 次)』 福島県教育委員会・(財) 福島県文化センター

鈴木克彦·岩渕宏子 2001 『青森県立郷土館収蔵資料図録―第3集·考古編(2)―』 青森県立郷土館

鈴木 源 1998 「弥生時代の蓋形土器」『列島の考古学 渡辺誠先生還暦記念論集』 渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 pp.151~159.

鈴木正博 2000 「「土器型式」の眼差しと「細別」の手触り一大洞A1式「縁辺文化」の成立と西部弥生式の位相一」『埼玉考古』35 埼玉考古学会 pp.3~31.

鈴木正博 2002 「弥生時代の板谷波山」『関東弥生研究会第2回研究発表会』 関東弥生文化研究会 pp.1~14.

鈴木正博 2003 a 「『亀ヶ岡式』から『遠賀川式』へ―『文様帯クロス』関係から観た弥生式形成期の複合構造と相互の密結合―」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』 日本考古学協会 pp.56~60.

鈴木正博 2003 b 「「遠賀川式」文様帯への型式構え」『埼玉考古』38 埼玉考古学会 pp.3~24.

須藤 隆 1973 「土器組成論」『考古学研究』19-4 考古学研究会 pp.62~89.

須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」『考古学雑誌』68-3 日本考古学会 pp.1~53.

須藤 隆 1996 「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告』33 日本文化研究所 pp.1~40.

須藤 隆 2000 「弥生時代の東北地方」『宮城考古学』 2 宮城県考古学会 pp.1~24.

関雅之・石川日出志ほか 1988 『鳥屋遺跡 Ⅰ・Ⅱ ―新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告―』 豊栄市教育委員会

高瀬克範 2000 「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』46-4 考古学研究会 pp.34~54.

高橋正之・高橋与右衛門 1980 『岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市つなぎ II・つなぎ IV・上野・南の又・堂ヶ沢 I・II 遺跡 「零石市広瀬 II 遺跡(昭和52年度・53年度)』(財)岩手県埋蔵文化財センター

高橋龍三郎 1993 「大洞 C 2 式土器細分のための諸課題」 『先史考古学研究』 4 阿佐ヶ谷先史学研究会 pp.83~152.

高堀勝喜ほか 1991 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会

田鎖壽夫・斎藤邦雄 1995 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集 大日向 II 遺跡発掘調査報告書―第 2 次~第 5 次調査―』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

田代孝・中山誠二 1984 『第2回特別展 縄文時代の酒造具―有孔鍔付土器展―』 山梨県立考古博物館

橘善光·奈良正義·小笠原正明·藁科哲男 2001 『大畑町文化財報告書第12集 二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』 大畑町教育委員会

田畑 弘 2003 『田上町文化財調査報告書第20集 保明浦遺跡Ⅲ─新潟県営高生産性大区画ほ場整備事業〔田上郷地区〕埋蔵文化財緊 急発掘調査報告書』 田上町教育委員会

田畑 弘 2004 『田上町文化財調査報告書第21集 保明浦遺跡 IV—新潟県営湛水防除事業〔田上郷地区〕埋蔵文化財緊急発掘調査報告 書』 田上町教育委員会

田村誠一 1968 「第3節 薬師Ⅱ号遺跡」『岩木山一岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書一』 岩木山刊行会 pp.89~116.

角南総一郎 2003 「弥生時代前期の蓋形土器—蓋の再発見と四国の事例—」『中の池遺跡—第8次調査— 総合運動公園整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書』 丸亀市教育委員会・(財) 元興寺文化財研究所 pp.79~86.

東北大学文学部 1982 『考古学資料図録』 1 東北大学文学部

永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 朝日遺跡 V (土器編・総論編)』(財)愛知県埋蔵文化財センター pp.363~376.

永嶋正春 2006 「居徳遺跡出土木胎漆器の漆絵に見られる大陸的様相について」 『原始絵画の研究 論考編』 六一書房 pp.85~93.

中村五郎 1988 『弥生文化の曙光』 未来社

中村五郎 1990 「第V章人工遺物 第1節土器」『三島町文化財調査報告10集埋蔵文化財調査報告書V 荒屋敷遺跡Ⅱ《河岸段丘低湿地の遺跡》一国道252号線改良工事に伴う発掘調査報告書─』 三島町教育委員会 pp.181~502.

中村良幸 1979 『大迫町埋蔵文化財報告第4集 小田遺跡発掘調査報告書』 大迫町教育委員会

奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所

林 謙作 1966 「桝形囲式土器の蓋と田舎館式土器の蓋」『物質文化』 7 物質文化研究会 pp.16~24.

藤田弘道・矢島敬之ほか 1987 『砂沢遺跡発掘調査報告書―図版編―』 弘前市教育委員会

藤沼邦彦・小川忠博 2006 『弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 3 ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』 弘前大学人文 学部附属亀ヶ岡文化研究センター

藤村東男ほか 1977 『北上市文化財調査報告第18集 九年橋遺跡第3次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1978 『北上市文化財調査報告第23集 九年橋遺跡第4次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1979 『北上市文化財調査報告第25集 九年橋遺跡第5次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1984 『北上市文化財調査報告第35集 九年橋遺跡第7次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1986 『北上市文化財調査報告第42集 九年橋遺跡第9次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1987 『北上市文化財調査報告第44集 九年橋遺跡第10次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1988 『北上市文化財調査報告第47集 九年橋遺跡第11次調査報告書』 北上市教育委員会

藤村東男ほか 1991 『北上市文化財調査報告第66集 九年橋遺跡第10次調査報告書(補遺)』 北上市教育委員会

宮本節子 2000 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第332集 相ノ沢遺跡発掘調査報告書―畑地帯総合土地改良事業―』 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

村木淳·小久保拓也·杉山陽亮 2005 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第107集 八戸市内埋蔵文化財発掘調査報告書20 是川中居遺跡 4』 八戸市教育委員会

森本六爾 1934 「煮沸形態と貯蔵形態—彌生式土器の蓋—」『考古学評論』 1-1 東京考古学会 pp.32~39.

八木勝枝・新井田えり子・吉田真由美 2006 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第481集 大橋遺跡発掘調査報告書―中山間 総合整備事業岩間地区関連遺跡発掘調査―』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

八木奨三郎 1902 『日本考古学』 嵩書房

山口博之・押切淳・黒坂広美 1995 『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集 宮の前遺跡第2次発掘調査報告書』(財)山形県 埋蔵文化財センター

山内清男 1937 『日本遠古之文化』 先史考古学会

山内清男 1940 「堀之内式 | 『日本先史土器図譜 第一部 第六輯』 先史考古学会

吉田秀享・吉野謹也 2001 『福島県文化財調査報告書第384集 県道古殿須賀川線(うつくしま未来博関連)遺跡発掘調査報告 松ヶ作 A遺跡』 福島県教育委員会

吉田 広 2004 「ひょうたん写しの土器」『考古論集―河瀬正利先生退官記念論文集―』 河瀬正利先生退官記念事業会 pp.363~374.

若林勝邦 1892 「六孔又ハ十孔ヲ有スル貝塚土器」『東京人類学会雑誌』78-7 東京人類学会 pp.413・414.

渡辺 誠 1994 「編み物の容器―籠と筌・箕―」『季刊考古学』47 雄山閣 pp.35~38.

#### <図版出典>

- 第1図 佐藤1898
- 第2図 1:西海淵遺跡 (阿部・黒坂1991)、2:相ノ沢遺跡 (宮本2000)、3:十三本塚北遺跡 (品田・平吹2001)
- 第3図 1~3:籠峯遺跡(親跡・野村2000)、4·5:小田遺跡 (中村1979)、6:向館遺跡(笹平・小山内1994)、7: 二月田貝塚(後藤1972)、8:羽白C遺跡(鈴鹿ほか1988)、 9:沼津貝塚(東北大学文学部1972)
- 第4図 平鹿遺跡(小玉1983)
- 第5図 1~5:安堵屋敷遺跡(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1984)、6:二枚橋遺跡(橘ほか2001)、7: 九年橋遺跡(藤村ほか1978)、8:宮ノ前遺跡(下段:山口ほか1995を再トレース、上段:筆者作図・トレース、山形県埋蔵文化財センター蔵)、9:滝ノ口遺跡(郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団1988)
- 第6図 1・14:二枚橋(2)遺跡(橘ほか2001)、2:宮野貝塚(佐々木2002)、3~10:九年橋遺跡(3・5・8:藤村ほか1987、4・6:藤村ほか1988、7・10:藤村ほか1984、9:藤村ほか1986)、11:釜淵C遺跡(向出博之氏作図・筆者トレース、山形県埋蔵文化財センター蔵)、12:山王囲遺跡(大場・氷見1998)、13:香ノ木遺跡(佐々木ほか1985)
- 第7図 1:二枚橋(2)遺跡(橘ほか2001)、2:沢山(1)遺跡(児玉1994)、3:亀ヶ岡遺跡(鈴木・岩渕2001)、4・21:剣吉荒町遺跡(鈴木・木村1988)、5・6:上新城中学校遺跡(石郷岡ほか1992)、7:川岸場I遺跡(及川ほか2001)、8:山王囲遺跡(大場・氷見1998)、9:漆坊遺跡(筆者作図・尾花沢市教育委員会蔵)、10:釜淵C遺跡(向出博之氏作図・筆者トレース、山形県埋蔵文化財センター蔵)、11:花ノ木遺跡(筆者作図・河北町教育委員会蔵)、12:蟹沢遺跡(佐藤1963)、13・14:げんだい遺跡(安部・月山1988、拓本筆者)、15:高瀬山遺跡(小林2005を再トレース)、16:大沼遺跡(榊原2001を再トレース)、17:字鉄遺跡(児玉・相馬2004)、18:細田遺跡(工藤・晴山1999)、19・20:川岸場Ⅱ遺跡(小山内2000)、22:殿内遺跡(杉原ほか1969)
- 第8図 原図:小林圭一氏提供
- 第9図 1:是川中居遺跡(宇部・小保内2002)、2~5:九年橋 遺跡(2・4:藤村ほか1977、3:藤村ほか1987、5: 藤村ほか1991)、6:荒屋敷遺跡(小柴ほか1990)、7: 青田遺跡(荒川ほか2004)、8:鳥屋遺跡(関・石川ほか 1988)、9~11:保明浦遺跡(田畑2004を再トレース)、12: 乾遺跡(岡本2001)、13:智頭枕田遺跡(設楽2004)、14・ 15:唐古遺跡(末永ほか1943)
- 第10図 1~3: 是川中居遺跡 (1・2: 村木ほか2005、3: 字部・小久保2002)
- 第11図 須藤1996
- 第12図 亀ヶ岡遺跡 (写真:藤沼・小川2006 (小川忠博氏撮影)、 模式図:藤沼・小川2006より筆者作成)
- 第13図 1:唐古遺跡・2:筒江片引遺跡(奈良国立文化財研究 所1993)
- 第14図 1:居徳遺跡(佐竹ほか2003)、2:羽白C遺跡(鈴鹿ほか1988)、3~5:志摩城跡(荒井ほか2006)

- 第16図 1:亀ヶ岡遺跡(1 a:清水1959、1 b:杉山1967)、2:十面沢遺跡(2 a:若林1892、2 b:杉山1923)、3:薬師(Ⅱ)遺跡(秋山・藤沼2007)、4:沢山(1)遺跡(児玉1994)、5・8・9:剣吉荒町遺跡(5・8:鈴木・木村1988、9:工藤ほか1997)、6:長谷堂貝塚(金子ほか1999)、7:大沼遺跡(榊原2001)、10~12:九年橋遺跡(10:藤村ほか1991、11:藤村ほか1977、12:藤村ほか1984)、13:大橋遺跡(八木ほか2006)、14~16:つなぎⅢ遺跡(高橋・高橋1980)
- 第17図 1:九年橋遺跡(藤村ほか1987)、2:川岸場 I 遺跡(及 川ほか2001)、3:千鶏IV遺跡(阿部1999)、4:上新城 中学校遺跡(石郷岡ほか1992を再トレース)、5:巻堀遺 跡(一迫町教育委員会1977)、6:山王囲遺跡(実測図: 伊東・須藤1985、拓本:藤沼・小川2006)、7・8:花ノ 木遺跡(筆者作図・河北町教育委員会蔵)、9:蟹沢遺跡 (佐藤1963)
- 第18図 1・2:青田遺跡(荒川ほか2004)、3:和泉A遺跡(加藤・荒川1999)、4:保明浦遺跡(田畑2004を再トレース)、5・6:乾遺跡(岡本2001)
- 第19図 1·2:沢山(1)遺跡(児玉1994)、3·4:上新城中 学校遺跡(石郷岡ほか1992)
- 第20図 1 · 2 · 10 · 11:砂沢遺跡 (藤田ほか1988)、3:生石 2 遺跡 (佐藤2005 a)、4:川岸場 II 遺跡 (小山内2000)、5:大日向 II 遺跡 (田鎖・齋藤1995)、6:君成田下野場遺跡 (佐藤1992)、7 · 8 · 12:地蔵田 B 遺跡 (菅原・安田1986、拓本筆者)、9:十三塚遺跡 (大友・福山1995)、13:六野瀬遺跡 (石川ほか1992)、14:青田遺跡 (荒川ほか2004)、15:九年橋遺跡 (藤村ほか1991)、16:丸子館遺跡 (実測図:小田嶋ほか2004、拓本筆者)、17:松ヶ作 A 遺跡 (吉田・吉野2001)

(2007年4月27日脱稿)

追記:本論文脱稿後、須藤隆2007『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性』と鈴木正博2007「亀ヶ岡式」分布の南下と西日本の漆工芸―「彩色漆文様帯」による弥生式文化形成視点の確立―」『環境史と人類』第1冊の2本の論考を目にした。須藤は本稿の蓋と特種壺を集成し、その組み合わせの可能性を指摘している。鈴木は居徳遺跡出土木胎漆器の蓋の系統を北陸地方晩期「下野式」の土製蓋に求めている。いずれの論考も本稿に深く関係するため、機会を得て逐次詳述していきたい。